

**「“本を味わい日本を知る”作文コンクール2017」**

**（「“品書知日本” 2017 征文大奖赛」）**

**入　 賞 　作　 品**



**主 催　 公益財団法人 日本科学協会**

**上海交通大学 図書館**

**目　次**

**＜和訳版＞**

**★一等賞**

華東師範大学　報道学院　施柯沁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

東北大学秦皇島言分校　外国語学院英語学科　劉頴慧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

大連海事大学　情報科学技術学院　郝顔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

北京大学　対外漢語教育学院　崔言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

上海交通大学 安泰経済・管理学院　邱舒怡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

**＜中国語原文＞**

★一等奖

华东师范大学 传播学院 施柯沁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

东北大学秦皇岛分校 语言学院 刘颖慧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

大连海事大学 信息科学技术学院 郝颜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

北京大学 对外汉语教育学院 崔言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

上海交通大学 安泰经济与管理学院 邱舒怡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

★二等奖

华东师范大学 物理与材料科学学院 向臻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

同济大学 外国语学院 吴沁霖・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

东北财经大学 财政税务学院 徐紫云・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

辽宁师范大学 外国语学院 杨晴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

苏州科技大学 外国语学院日语系 庄寓谐・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

云南大学 民族学与社会学学院 李晓荷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

天津外国语大学 国际传媒学院汉语言文学 锦辉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

宁波大学 人文学院 吴犇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

湖南师范大学 新闻与传播学院 金卓弘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

兰州大学 哲学社会学院 谢诗桢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

**＜和訳版＞**

**★一等賞**

**「深夜・食の味・小さい世界」**

**華東師範大学　報道学院　施　柯沁**

安倍夜郎先生の『深夜食堂』を評価してみようと試みたなら、私は幼時の祖母の家の醤油かけご飯を思い出します。その年に穫れた新米を選んで、農村特有の土のかまどでゆっくりと蒸かし、台所に白い霧が漂うまで待つと、米の香りがあふれ、待ちきれなくなって空の茶碗を差し出すと、祖母が雪のように白いご飯につやつやのラードを混ぜて何滴か醤油をたらしてくれました。黒々とした醤油がみずみずしく光る米粒の間にしみ込み、稲、薪、脂、発酵した醤油の香りがゆうゆうと混じって、最も簡単な食材を合わせただけなのに、好き嫌いが激しい愚かな私の味覚を虜にしてしまうのです。

新宿の裏道で開く深夜食堂は、営業時間が真夜中十二時から翌日七時。入ると何もかも見えてしまう店では小さい厨房が三面をカウンターに囲まれています。店主は中央でお客ひとりひとりに声を掛け、お客は頭を上げれば互いの顔が見えます。固定のメニューはなく、できるものだけ出して、店主は満足しています。

日本の美食に関係する本はたくさん読んだことがあります。北大路魯山人の『日本味道』、小川糸の『食堂かたつむりの料理』は美食家の食物と人生に関係する思考を述べていたり、個人が料理の中で体験した実際の生活の話を述べたりしています。しかし『深夜食堂』は例外です。安倍夜郎先生は小さなコマの中で、食べ物を手がかりに日本の都市で暮らす特殊な人物を描いています。普通のサラリーマン、ヤクザのアニキ、こそ泥、ストリッパー……日の当たらない役回りの人々は、平々凡々としていて常人には軽蔑さえされますが、安倍先生は頑として、こうした私達が敢えて視線を背けている群れの生活を拡大してみせます。どうでもいい善悪もない、白飯のような最も簡単な線描に最も地道な悲喜愛憎で味をつけているのですが、山海の珍味と異なるまろやかでさまざまな味がするのです。

ある日本の大衆食堂についての記録映画では、取材を受けた人が「こういうところが好きなのは、いろいろな人がいて、いっしょにいると気楽だから」と話していました。『深夜食堂』はまさに一つ一つの出会いから構成されています。食べ物は実に優れた媒体で、さまざまな人が外在する身分、性別、年齢をしばらく放り出して共通の味覚だけを縁に知り合います。竜はヤクザのアニキで、小寿々はゲイバーの経営者ですが、タコさんウインナーと卵焼きを分け合ったことで、彼らの人生が交わります。竜はいつもタコさんウインナーを注文して小寿々を待っており、小寿々も竜と分け合うのを喜んでいました。竜が負傷して入院すると、小寿々はわざわざ好物のタコさんウインナーを贈っています。現代社会が秩序をもたらしたのと表裏で、都会の人は礼儀作法の維持と引き換えに人情を偽装せざるを得なくなっているのかもしれません。印象の中の日本は人と人との礼儀作法を強調する国で、きちんとした印象には敬服しますが、こうした習慣のせいで気づかない間に人の群れの感情の隔たりができるのではと心配でもあります。ですが深夜の小さい食堂に凝縮された、無条件で気兼ねのない交際と信頼関係には深く感動しました。一度会っただけで起こった不倫、中年「竹の子族」の青春の回想、女友達の間の情けと裏切り……まるで最も質素な食材をごった煮にしていろいろな口当りを出したように、ほど良い距離感と好みが合う同士のめぐり会い。深夜食堂に集まる他人同士が文明社会の最も重視する外在をよそに腹を割って話し合い、尊敬し合って、酸い、甘い、苦い、渋いより多様な味をつけた生活は、些細ないざこざの中にあります。偶然にめぐり会った人が率直に気持ちを話すことを学んで、いっそう心から互いに向き合い、支え合いながら生活の逆境を抜ける、といった出会いは、もっと早く会いたかったというものではありません。感情というきつい酒を一気に飲み干せるというものでもなく、文明の後ろ姿の中のささやかな食事で、ほんの少しずつ味わって咀嚼するに値します。人間が最もよく知っていて最も忘れすい世の中のいつまでも続く温情が、お客の一人一人をやさしくもてなすのです。

『深夜食堂』では個人の物語も綴られています。あるいは、一つ一つの出会いは実は個人の他人を介した自己観察だとも言えます。料理は人の心を反映すると言われます。生命に刻まれた本能により、人々は食事するとき自然と雑念を忘れ、味覚の感知に任せて、記憶の深い所にある最初の思い「お父さんの焼きそばが一番好き！」呼び起こすことができます。たとえ父親が借金取りを避けるため姿を隠して何年経っても、歌手の倫子は幼い頃に育ててくれた父の焼きそばの好みを覚えています。なじみの青のり焼きそばを口にしたとき、ついに自分の内心の深いところで父を慕う思いを避けられませんでした。ゆで卵が好きな毛利先生はずっと自分の頭がかつらであることを隠していました。勇気を奮い起こして彼女に打ち明けると振られてしまいましたが、最後には自分も見た目で人を判断することは避けられないのだと分かり、つるつる頭の自分を受け入れました。ぽっちゃりさんのまゆみちゃんは、最愛の牛すじ大根とダイエット計画の間で行ったり来たりしています。愛の女神は一向に構ってくれませんが、美味しいものを慰めに、本性に従って努力を続け……美食家が食材を掘り起こすことで生命の真の意味を追求しようと渇望するのを、高僧が修行に専念して道を求めるようだと喩えるとしたら、『深夜食堂』の小人物は騒がしい俗世から隠れ、自然な感情の動きの中で世の中のあれこれを味わう行者により近いでしょう。私は日本の文芸作品の中にあるこうしたこまごまとした日常が好きです。普通の人の心の底にある小さく確かな幸せや小さな悩みが日常の食事に反映されているのを見るのが好きです。社会の底辺にいる人たちが都市のキラキラしたうわべの下にある粗野な姿を見て、基本的な日常生活で言い争っていて、それでも傲慢でも卑屈でもなく、不平をこぼしながら、また気丈に次の朝を迎えて。彼らは大きい世界の街角で世に知られずに成長しながら、自分の小さい世界の中でかけがえのない主役になろうと努力しているのです。

安倍夜郎先生がずば抜けているのは簡明で面白い画風とすばらしさに満ちた展開だけではありません。誰もが壮大な事柄を物語を強調するなかで、敢えて大きい世界の中のとある微小な層を代表し、静かに彼らの歌を歌うところにすごさがあります。日本の現実文化に根ざしながら文学の固有の国境を越えた人本主義への配慮は、まるで寄り合い住宅の中で町内の人の日常を丁寧に聞いているかのようです。喜びと憂いとちょっぴりの同情を挟み、寂しさを訴える都市の個人が自分の小さい世界で名利を求める以外の精神を託す強さです。

日本を訪れる機会があったら、是非とも深夜食堂を見に行ってください。真夜中十二時にのれんが掛かる、にぎわいの背後で夜更けに感情を忘れ落ち着き先のない都会の人々の、狭いけれど最後の船着場です。

注：読んだ本は『深夜食堂』　安倍夜郎[著]

## 「人間に失格なし」

**東北大学秦皇島言分校　外国語学院英語学科　劉頴慧**



初めて『人間失格』を読み終わったとき、すでに深夜でした。

本を閉じてそっと枕元に置いてから、消灯して静かに横たわりました。その夜は寝返りばかり打っていて寝付けませんでした。

読書はちょっとした趣味なのですが、今回は初めて本を置いたとき重荷を下ろした感覚がなく、いつもと反対に疲れ果てていました。

目を閉じると、狂喜だけでなく恐怖心も手伝って、胸の中に火傷しそうなほど熱い力がこみ上げてくる感じがして、息苦しくなっていたのです。この感覚はそれから二度拝読しても増えるばかりで、今こうしてこの文を打ち込んでいても両手が少し震えています。

太宰先生、代わりに号泣して差し上げたいのです。

太宰先生の綴られた物語は図らずも私の途方に暮れた魂の世界とこれほど符合しています。これまでの読書の中で出会った最大の幸運と言えるほどです。

『人間失格』は日本の「私小説」分野の天才作家、太宰治の代表的作品です。太宰先生の一生は起伏が激しく、先生は何度も自分の生命を終えようとしていました。『人間失格』の主人公、生活に元気がなく、何度も死を求める大庭葉蔵のモデルはまさに彼自身で、彼はこのように少しも容赦なく自分の体に苦痛の烙印を押し、血を滴らせながら人々の前に現れました。そして彼は『人間失格』の脱稿から一か月後、恋人と川に身を投げ愛のために命を絶って、語り尽くさぬ物語をこの世に残したのです。

「弱虫は幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福に傷つけられることもあるんです。」

これは太宰先生が『人間失格』で残した言葉そのものです。不幸なことに、こうした絶望に近く心が痛む筆致は昔も今も世間から軽蔑されています。しかしこのフレーズこそが私の胸の底まで突き刺さるのです。太宰先生は名門の末っ子として生まれ、常人には理解しがたい圧力に耐えていました。おかしなことに、その圧力は他人からではなく、彼の家族、身内からのものでした。まさに書かれているように、昼食を摂る光景でさえ葉蔵には身の毛がよだち、身震いがするものでした。長期の重苦しい生活は幼い葉蔵をおろおろさせ、さながら生き地獄でした。彼が卑しく脆弱なのは、生活がこのように重々しく耐えられないものだったためです。彼は人間を恐れながらも、人間をあきらめることができませんでした。ゆえに彼は滑稽な言行で人類に最後の求愛をすることを選び、仮面をつけたピエロになってしまいました。

ピエロなので人々には彼の内心の深い所でぽたぽた滴る涙は見えません。彼の悲哀はまさしく他の人の笑いぐさで、たとえ手足が切断され歯が折れても、誇張した笑顔を絞り出さなければなりません。彼は滑稽さで武装するほかないのです。

ピエロだから。

笑う面の陰に隠された心がとっくに支離滅裂だなどと知る人はなく、奇妙な世界に覆われている彼の不安は誰にも理解できませんでした。あまりにも多くの致命傷を受けたため、彼は逃避するようになり、臆病、見かけ倒し、怠惰になって、落ちぶれたのです。彼は自らの人生を残念なこの世の悲劇にしてしまいました。天涯孤独で、困窮して流浪の身となって、ぼんやりと、猛烈な狂喜を回避しつつ悲痛さの来襲からも逃れていました。それで人生は一枚の紙に包まれたようにぼんやりしていて、本来の姿が見えないので、幸福とも不幸とも言えません。言い換えると、最も恐ろしい平凡だけがあったのです。

こんなおかしい姿になろうとは誰も思いません。まして葉蔵には夢もあり、是非も弁えています。だから、彼が苦しめられるあまり憎たらしい容貌になったとしたら、罪はこの世界にあるのです。

世間の人は最もひどい生物で、いわゆるすべての暗黒面を許容することはできず、本の内容をさらっと眺めるだけで自分を道徳上の高みに置いてしまいます。もちろん、決して自省するつもりもありません。世間の人は「正義」の旗印を掲げて太宰先生を攻撃し糾弾します。彼は狂っていると言い、いたずらに感傷的だと彼を笑い、彼の内心の暗さを批判して、彼が薄弱だと感慨を覚えます。それが世の中です。いかなる汚点も罪も容赦できません。まさか私達は象牙の塔しか受け入れられないのでしょうか。まさか私達はみんな大喜びのおとぎ話しか好きになれないのでしょうか。まさか私達の誰もが罪なく、いつでも心に曇りがないのでしょうか。まさか世界に悲哀が存在してはいけないのでしょうか。まさか私達は自分の良心に尋ねて全くやましさを覚えずにいられるのでしょうか。

誰もが暗黒面を隠し、鮮やかに輝く美しいうわべで完璧な仮相を造り出して、他の人の真実を非難して楽しんでいるだけなのは誰でも分かっています。

世間の人とは、どうしていつもこれほど残酷なのでしょうか。

いわゆる世間の人とは、まさに私達ではありませんか？

世の中に最も多いのは、ただまじめくさった顔つきをしているだけの偽善者です。そういう人が最も迎合しやすく最も生存しやすいのです。ゆえに、罪ある者がのうのうとし続け、単純な者は懺悔しています。悪人は聖地を巡礼するふりをして、聖人は地に落ちます。つまり絶対的大部分は、孤高な世間の人が本当の人間性を隅に追いやっているのです。

なんと顛倒した世界なのかと思わず感嘆してしまいます。

太宰先生が解らせてくれたのは、困難な世界の中で真相が見つかること、物事の成り行くままに従うことなど最初から無理だということです。

葉蔵の人生は哀れみを誘うもので、何度も自殺して、身内に捨てられ、友人（あるいは不良仲間）に嘲笑されて、最後にはぼろぼろなあばら家で余生を過ごします。しかし彼には本当に少しもいいところがなかったのでしょうか。文章の最後で、バーのマダムが葉蔵を「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」と評価しています。

神だから、自分を救済できなかったのでしょうか。

これこそが『人間失格』の真相です。太宰先生が伝えようとしたのは「罪の多い者は愛もまた深い」ということです。しかし、多くの人は作中で描写された葉蔵の罪しか目に入らず、世間の人に対する先生の愛の深さが分かりません。彼はイバラの中で優しい花をほころばせ、また世間の重い愛の中でしおれました。

平和な年代に生まれた私達は、独りよがりに他の人へ勇者たれと押しつけてはなりません。私達は太宰治ではなく、太宰治になれない運命なのだから、太宰治の人生に平凡な大衆の姿を期待すべきではないのです。いわれなく先生の人生を疑っても空騒ぎに過ぎません。何が高尚で何が浅薄なのか、すべては時間が証明します。一瞬の人も、不朽の人もいます。

先生は胸いっぱいの愛で浮世に別れを告げたのだと私は堅く信じています。彼はその一生で愛すべきものはすべて愛し、返すべきものもすっかり返しました。彼は最後の一刻、きっと生命に対して安心したことでしょう。だからこそ世の中にすばらしいはなむけの言葉を残したのです――

「絶望するな。 では、失敬。」

これはひとえに太宰先生の洒脱さによるもので、もっともらしく悲しんでみせる必要はなく、口先だけの挽歌も必要ありません。

さあ、それでは笑顔でお別れを。

先生、ずっとお世話になっています。

雲の向こうで圧迫と束縛を抜け出して、自由で幸せでいらっしゃいますように

参考：『人間失格』

**「風の中に音あり、砂の上に印あり」**

**大連海事大学　情報科学技術学院　郝顔**



かなり躊躇してから、ようやく拙文を書き始めました。あれだけの文字を読んでから、心の思ったこと、感情の向かう先を書き留めるのにはいつも抵抗を覚えます。雨の日や深夜に心静かに本を読むたび、本に触れた感覚の柔らかさと軽快さが今でもこだましています。ああ、風の中でなくしたあの音は、まだそう遠くへは行っていない……

自分の感情が大きな流れに沿っているかは分かりませんが、たぶんやや独り歩きしています。しかし私は最も真心のこもった言葉で東野圭吾の小説を読んだ感銘を表したいので、それほどはっきり書けないかもしれませんが、自身が読んで理解できる限界なのです。

ある日『容疑者Xの献身』を手に取って、論理思考は得意でないものの推理熱が高まっていた私は、東野圭吾の著作を読み始めました。分厚い本ではないものの、ごく筋道だった章節にはひたむきな男性のイメージが描かれていました。簡単で短い対話と太い線でスケッチされた情景で、日本に、そしてスラムのある旧江戸地区に本当に引き込まれました。そこには助け合って生きる母と娘がいて、考えが綿密で感情の欠けた数学教員がいて、鋭い眼光と超人的な頭脳の探偵も欠かせません。私はそうしたものが推理小説の肉体を構成しており、その魂は人物の錯綜した複雑な関係サスペンスに満ちた殺人事件と解決までの紆余曲折の過程なのだと思います。幸い主人公間の関係は複雑ではなく、何のつながりがあるとも言えないものまであります。母と娘が初めて訪問したときぱっと目に入った汚れのない眼差しだけで男性主人公は改めて希望に燃え上がりました。常人からすると、一度の平凡な出会いで火花が散ることなどあり得ません。私はいつの間にここまで深くはまってしまったのでしょう。ヒロインは不幸で、前夫のいざこざにつきまとわれていますが、しかし彼女はきっと幸運です。手元が狂って殺人事件を招いた後、隣人からの援助がありました。しかし隣人が命を惜しまぬほど彼女を愛する守り神だったとは彼女が知るよしもありません。石神は厳密にもう一つの殺人事件を作りだしてこの殺人事件を覆い隠しましたが、それはもう大変なことです。残念ながら完璧な計画も結局は破綻し、彼がガラス戸に向かって髪をいじり、無名氏が消えるシーンを通じて、真相が明らかになります。東野君の小説の魅力には「天網恢恢疎にしてもらさず」の法理も含まれているのかもしれません。物語そのものから私は世の中の真実の愛が海のように広大な、ひた隠しに隠されたものだと味わいました。風の中には愛の音信が翻り、砂の上には思い慕った印が刻まれています。

東野作品には男女の感情だけでなく、もっと普遍的な気持ち、人を救うことの善がにじみ出ています。『ナミヤ雑貨店の奇蹟』では、通り抜ける性質のかなり強いブリッジプロットが確かに一大ハイライトです。浪矢老人は道に迷った人々を助け悩みを解いてあげていましたが、さらに一連の非常に不思議な効果で、ぼろぼろな雑貨屋で世に比類のない並み外れた救済劇が繰り広げられました。ある孤児院が一つ一つの物語を束ねてタイムカプセルに詰めました。浪矢老人は茫然としている人のために方向を示して、世界にすばらしいものを残したのです。風中に音あり、信中に情あり、初心を忘れず、それでこそ完成。

人は善悪を分け、道理は自然です。まさに『悪意』でゴーストライターが自分より有名になった作家を謀殺するなどは社会の恥です。どんな苦しい胸の内があるにせよ、ここまで悪辣な行為をしてはなりません。しかしよくよく考えてみると、二者とも元から悪意を持っていて、一人は相手を何かにつけ脅迫し、一人は動機を心に隠していました。二種類の悪意がぶつかり合って、おのずと取り返しの付かない悲劇に変わり、二人とも戻らぬ人となってしまったのです。人は貪欲な動物で、虚栄の存在でもあり、その両方がかみ合えば、道義が滅び、闇が湧き返って、災難が四方に潜みます……

それから東野圭吾作品の無冠の帝王『白夜行』を読んで、深く心を打たれました。私はこの本の核心は悪に帰結すると思います。人を引き付ける名前をした雪穂はあたかも苦心して身につけたかのような気高い風格ですが、そこには彼女の極度の虚栄心が見えます。彼女の背後に一体どれだけの真相が隠されているのかは難解で、私にははっきり言えませんが……世の中にここまで汚い取引があるとは思ってもみませんでした。お金のために母親が娘を生き地獄に突き落とすこともいとわないなんて。雪穂が母親を殺害したことも含めて、人間性の醜さが体現されています。そして桐原は雪穂を守るため、自らの父を殺めてしまいました。こうして家庭の温もりを失った二人は、罪を隠すため、手を尽して身内や友人を殺すように。一幕一幕の計画、一つ一つの殺人事件、一件一件の取引が脳裏に投影されるたび、賛嘆してやみません。一体どれほど彼らの心が残忍で、野心が大きく、策略が複雑なのか、私には分かりません。私に分かるのは、残酷な生活にねじ曲げられた傷だらけな絶望の心だけです。手に手を取って太陽の下を散歩したいだけ、という物語の核心を象徴する絶望の思いが、美しい表看板を掲げているかのように、無数の無秩序な行為に沿って一つ一つ元の姿に戻っていきます。全文を通して二人が向かい合い本心を見せることはなく、永久の誓いの言葉もありません。最後には氷のように冷たい絶望の詭計だけが残って、雪穂の偽装たやさしさと桐原の暗部の憂鬱さが照り映えています。亮司が飛び降り自殺をしたとき雪穂が振り向きもせずエスカレーターに乗ったそのとき、最後のわずかな温情さえ灰燼に帰してしまったのだと分かりました。雪穂の自白も最後に少しだけ分かりました。「私の空に太陽はなく、いつも闇夜だけど暗くはない。太陽の代わりがあるから」……彼らの背景が奪い去った光明と希望は、哀れでもあり憎くもあります。その中で最も絶望した思い、最も悲嘆した見張りが展開されたのです。またこの思い、この地味で実現できない運命の愛にこそ、東野圭吾は日本文学の焦がれ続ける永久の悲しみを留めています。風の中に音あり、それは切ないうめき。日中に夜あり、それは悲しい終結。

東野圭吾の小説には、日本の探偵小説に顕著な特徴である科学的教育性の強さが映し出されています。小説の背景を探るうち、彼の知識面とあまりにもの時事問題をつかむ力の強さを深く感じました。彼は現実に対する思考と適応、再認識、応用の能力が本当にずば抜けていて、我々が学ぶに値します。

本は人生のようなもの、本を味わうのもまた人生を味わうことで、一冊の本が生活に根ざしてしかも俗世間より高みにあるさまざまな人生を演繹してくれます。さまざまな辛酸苦楽が、水を飲むかのように自ずとよく分かり、そこにある美醜や善悪は、心の秤にかければ火を見るよりも明らかです。風の中をかすめて飛ぶ鳥の翼は少しも痕跡を残しませんが、その音で鳥が飛び去ったことを世界が知ります。砂漠が映し出すラクダの影は夜の闇に埋もれても、連なった足跡がラクダが遠くへ行ったことを後の人に示します。人はそれぞれに人生があり、あるいは悲しみあるいは喜びますが、人として生まれた以上、痛快に生きるべきではないでしょうか。痛みでさえ楽しむのです。どのみち最後には誰の終わりも同じなのですから。愛と美を選べば、生きる価値がもう少し大きくなるのではないでしょうか。少なくとも、年老いて昔の事を回顧するとき、自分が風の中に残した音を耳にすることができて、果てしない泥道の途中に残した印が見えれば、不快ではないでしょう。

容疑者Xの献身、東野圭吾（著）、劉子倩（訳）、南海出版公司、2014年

白夜行、東野圭吾（著）、劉姿君（訳）、南海出版公司、2013年

**「海坂藩の土地」**

**北京大学　対外漢語教育学院　崔　言**

江戸から北へ百二十里、石高七万石の「海坂」という小藩。三方を山に囲まれ、北は海に臨んでおり、南は伊波山（『臍曲がり新左』）西は波切山（『冤罪』）、北は荒倉山です（『相模守は無害』）。

城郭は街を流れる「五間川」の西にあり、街中どこからでも顔を上げるだけで美しい天守閣が見られます。五間川の岸辺では密生する桜と柳の木が不気味な気配を引き立たせ合っています。この一帯で嶺岡兵庫が暗殺され（『暗殺の年輪』）、石橋銀治郎が二人の剣士と取っ組み合いました（『秘太刀馬の骨』）。また牧文四郎がふくとその子を護送して船で五間川を下ったとき、里村家老一派の追っ手をかわしています（『蝉しぐれ』）。

歓楽にふけりたければ染井町は美酒と美女で知られる花街。存分に美食を満喫したければ三屋清左衛門のひいきにする「涌井」というお店があります（『三屋清左衛門残日録』）。清貧な井口清兵衛は慌ただしく初音町で豆腐とネギを買って帰り（『たそがれ清兵衛』）、食事の支度をしていました。

時代小説家の藤沢周平がこの架空の北国の小藩を背景として創作した一連の小説はのちに「海坂もの」と呼ばれ代表作となっています。向井敏が小説の評論を一冊にまとめて『海坂藩の侍たち』と名付け、自身も有名な作家である親友、井上ひさしも『海坂藩への感謝』と題した弔辞を読んでいます。

「海坂」という名前は実は「藤沢周平」よりも早くから存在していました。作家の本名は小菅留治といい、湯田川中学の教員でしたが、肺結核にかかって入院したとき知り合った友人に俳誌『海坂』を紹介され、投稿を促されたのです。「海辺に立って一望の海を眺めると、水平線はゆるやかに弧を描く。そのあるかなきかのゆるやかな傾斜弧を海坂と呼ぶと聞いた記憶がある。うつくしい言葉である」（『小説の周辺』）。「うなさか」とはかなり古い言葉で、『古事記』では、豊玉姫が海の国に帰るシーンに登場します。漢字では「海境」、「海界」とも表記され、凡人と海の神との境界を指しています。

当時は肺結核は重病だったため、療養所はさながら生と死を区別する境界線のようなものでした。たとえ全快しても、患者が順調に社会復帰するのは難しく、小菅留治の教職復帰申請は拒絶されていしまいました。しかし療養中に句作や文学作品の鑑賞に勤しんでいたことが、のちの作家人生の基礎となります。あの海と空の交わる弧を越えて、もしかすると新しい世界へ。死と隣り合わせの無常な人生、病友との助け合いのすばらしさ、社会復帰する淡い望み、文章を書き始めようという考え、すべてが「海坂」に含まれています。

彼は随筆の中で、海坂藩は郷里の庄内藩一帯がモデルだと述べています。海坂ものにちょくちょく出てくる庄内の料理、方言、風俗などがこの架空の藩に現実味を注ぎ込みました。「写実性つまり現実味を加えても決して物語のフィクション性を薄めはしない。」「人は社会、家庭、血族のいざこざに縛られる……私の小説の主人公もそうした様々な制約を与えられたため、虚構の中でリアルに生きられる。」（『自作の隠し剣シリーズを読み返して』）

では、リアルさを求めるのに何故こうした藩を作り上げたのか、ないし、どうして現代小説を書かなかったのでしょうか。作家自身が、今の人情を書くには時代小説が一番で、現代小説だと照れてしまって書き始められないと述べています。他方、時代小説も完全な空想にはできないもので、現代と何のつながりもなかったら古くさくなって耐えられません。（1992年の岡崎満義との対談）。

これらの陳述の背後にあるのは、作家の「距離感」のほど良い把握です。つまり当事者は戸惑いを避けられないため、落ち着いて書くにはある程度の距離を置句必要がありますが、あまり疎遠にすると空想に成り果て、現代の読者と通じ合いにくくなってしまうのです。

多くの読者や評論家が海坂藩视は藤沢周平が創造した「日本人の心の理想郷」だと見ています（井上ひさし、松田静子、杉本章子、関川夏央ら）が、こうした評価は辺鄙な北国の小藩にはおよそ似つかわしくないものです。まして一般的な意味でのユートピアと違うのはなおさらで、海坂藩は至る所に現実的な束縛があり、小説の主人公は主に下級の藩士のしかも家を継ぐ長男ではなく前途の薄暗い次男、三男で、そこに晩年のご隠居と貧しい貧乏な家の女子……

しかし、本当に豊饒な土地はまさにこのような姿なのではないでしょうか。ただ単調な幸福だけを生産し、勝者の歴史を書くのではなくて、多様な暮らしを育んでいるのです。これらの下層にいる人物は最も地に足がついており、運命の束縛を背負っていても自己の意志を保ち貫いて、誠実に生活していけるのです。秋は麦が穂を垂れ、冬は雪で真っ白になり、春は花が鮮やかに輝き、盛夏には大樹の枝葉の間からけたたましく蝉の声がほとばしり、生命の感情の叫びをいっぱいに含む四季の辛酸をしばしば経験してこそ格別にすっきりして見えるのです。

読者が憧れを抱くのは一人や二人の完璧な人物や数本の偉人伝ではなく、この深く含みのある土地なのです。古今の隔たりを超え、架空と現実の境界線を渡り、手を伸ばして書物のページの中からひとつかみ海坂藩の土を掘り出すと、そこからわずかな人生の悲しみや楽しみのすがすがしい香りを嗅ぎ取れます。歳月の流れに磨き上げられた質感に触れ、粛然と失望を感じるのです。[[1]](#endnote-1)

注：

「海坂もの（海坂藩を舞台とした小説）」の範囲は定義により異なります。『海坂藩大全』には「海坂藩」、「五間川」、「染川町」のいずれかが明記された作品が収録されており、阿部達二は3つのやや厳格な判定基準を採用していますが、向井敏は藩名が明示されていない『三屋清左衛門残日録』や『風の果て』なども含めています。作家の創作時期によっていくつかの細かい設定が調整されいてるため、本文では広義のものを採用し、諸評論家が海坂藩を背景だと考えている作品をすべて海坂ものとしています。

参考文献：

小説の周辺、文春文庫、1990

ふるさとへ廻る六部は、新潮文庫、1995

「蝉しぐれ」と藤沢周平の世界、文藝春秋、2005

藤沢周平と荘内、ダイヤモンド社、2007

海坂藩大全、文藝春秋、2007

「蝉しぐれ」の世界、鶴岡市藤沢周平記念館、2011

「海坂藩」のふるさと、鶴岡市藤沢周平記念館、2015

**「生命の優雅なる罪と高貴なる過ち―三島由紀夫『春の雪』を読んで―」**

**上海交通大学 安泰経済・管理学院　邱舒怡**



実際、本当に『豊饒の海』四部作を通して読んだのは一度だけですが、第一部『春の雪』は何度も読んでいます。というのは、物語のその後の展開を知ってから、一回また一回と生死が巡って通り過ぎる、こうした悲劇の直接的な読後感は、かえって『春の雪』のわずかな言葉から覗く、もの悲しさの痕跡のような、隠れた憂いと悲しみの気持ちから来る優美さに及ばないと感じるからです。

これは「春の雪」という日本文学の「もののあはれ」の特色を強く帯びた見出しからも見て取れます。春は花、秋は月、夏は雨、冬は雪こそ四季の移ろいに合った「風物」です。雪と春はそもそも相容れないもので、ゆえにそれ自体が、起きてはならないことが起きてしまったときの、光を当てるわけにいかない愛の物語を示しているのです。ちょうど主人公の松枝清顕が言っているように、ふたりの愛は結局のところ「終わり」を考えないところから始まるのか、それとも「終わり」を考えるところからやっと始まるのかということです。春の雪は、まさに清顕と聡子の自ら滅んでいく愛であり、タイトルから繊細な悲壮感が透けて見えます。弱小な体で打ち勝ちようのない強引な押しつけや権力に対抗する唯一の方法は、こっそりと冬と春の境を迎え、一瞬のうちに解けてしまうことで季節に支配されない自由を示すこと。ちょうど作中の清顕と聡子のように。聡子が皇族と婚約してから互いに心のうちを明かして愛欲の河へ落ちる決意をしていますが、私通する不潔さや下品さはかけらもなく、生命が幾重もの束縛を突き破って一線を踏み越える優雅な姿を見せています。これこそが清顕の感じ取った「優雅というものは禁を犯すものだ」という感覚なのでしょう。そして禁を犯し常軌を逸した行為をなしたその刹那、恋も清顕と聡子も人の世からほどなく去る宿命を背負い、だからこそ最後に、この平安時代の雅さを持つふたりは、片や剃髪して尼となり仏門に入って、片や早々に若くして世を去ってしまったのです。

これこそが、美に人の心を打つ力があるのは消失と死が影のように寄り添っているからという三島流の美学の理念でしょう。あたかも蜷川実花の映画『さくらん』の中で花街の入り口に置かれた金魚鉢の金魚のようです。美しいけれど、いったん飛び出せば死ぬしかないのです。三島は美と「生」の描く境界から踏み出すことで消え去るさまを結びつけた描写に慣れていますが、それもこうした美が悲壮感を帯びており、最終的に消えてなくなることも美しさをまとっているからでしょう。それは彼の最も有名な作品『金閣寺』から見て取れます。金閣には人の心を奪う美しさがありますが、最後に大火で焼き払われたときの「完璧」から「壊滅」へ至るなまめかしさと残忍さを帯びた美感だけが文学史上に力強い一筆を残しているのです。

こうした美学の理念は日本文学の歴史上で脈々と受け継がれていると言えます。平安時代の偉大な作品『源氏物語』の中で、光る源氏の君はあちこちで妙齢の少女、ひいては人妻とまで密通しています。愛情の虚無とつかみどころのなさが一回また一回と礼儀作法の垣根を越える中に、人の心の琴線を捉えて放さない美感が現れるのです。そして『春の雪』では、清顕は初め聡子が好意を示しているのに優柔不断で、その愛情を受け入れる勇気がありませんでしたが、聡子が洞院宮と婚約してやっと自分の聡子への愛に気づき振り返ります。運命と気持ちの無常は『椿姫』と比べうるすれ違いや過ちをもたらし、まさにこうしたもつれ合いと苦痛のせいで、婚約中の彼らの密会が手に汗を握るものとなっています。まさに題名の言うとおり、愛情のために身の危険をも顧みない、優雅なる罪と高貴なる過ちなのです。

清顕は間違いなくこうした行為をする気質で満たされています。彼は繊細、敏感で、やや疑い深いところまであり、よくいろいろな夢を見ています。自分の「夢日記」をつけており、彼が自分の死亡した後に魂が棺桶の上を漂ってで自分の死んでしまった肉体を高い所から見下すと空想さえして……三島由紀夫は後期の作品で狂ったように肉体美と雄々しい壮健な風格を求めて続けていますが、それも彼が身体を鍛え続けており、非常に侵略力のある美しい写真集『薔薇刑』を残しているためですが、そうした作者も最後の作品では清顕のような優柔不断で少年っぽさに満ちた男性のイメージを作りだしています。思うに、彼は清顕のような役回りに自分のもう一つの感情豊かで繊細な人格を託して、人物にそうした人格を付与すると同時に、清顕の常軌を逸した行為によって自分がそのとき遂げられなかった越境を果たしたのかもしれません。続く『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』も同じ道理で、例えば『奔馬』では紅日を目の前に切腹する勲少年を描いていますが、現実には『天人五衰』を書き終えた後、三島本人も勲と同じ急進的な行為に走りました。彼は何度も生まれ変わっては境界を越え死んでしまう「清顕」を通して、実際の生活では誰も出来ない「罪」と「過ち」が含む残忍な美しさを解釈しているのです。

これでシリーズ全体の名前、『豊饒の海』を振り返ることができます。この「海」については多くの人がさまざまな解釈をしており、人の豊富な感情だとする考えもありますが、三島由紀夫がこの四冊の中で物語といざこざを通して述べてようとしたような、生死が巡る東方の哲学観から見ると、「海」は「生命」の象徴だという考えのほうが合理的です。手がかりとして存在する本多の目の中で、清顕は四冊の中で別々の身分として存在し、永遠に二十歳足らずの若い生命としてこの世の中をさまよい突破できずにいます。彼は死のたびに一度の命を終え、禁忌を犯すことを通じて生存の実感を獲得し、それまで体得できなかった青春の活力を獲得するとほどなく「死亡」の形で消えてしまいますが、彼はこの世、すなわち「生」の「海」を逃れられていません。彼と比べると、聡子は恋をどうしても終わらせざるを得ない最後に、俗世からの死を選び、尼となって、しかもシリーズの最後には清顕の存在を否定し、本多の抱いてきた60年余りの夢を粉砕しています。彼女が象徴しているのは生きながら死すという生命の包囲の突破で、俗世からの死を代償として輪廻を離脱した存在です（清顕の四度の「転生」と対照）。

三島由紀夫の美学の観念はこの本の中で型にはまらず上品で繊細な風格に現れ出ていますが、変わらないのは彼が文字の中でずっと探し求め続けた人生の優雅なる罪と高貴なる過ちなのです。

読んだ本について：

『春の雪』　【日】三島由紀夫（著）　【中】唐月梅（訳）　上海訳文出版社

参考文献：

⑴『不思議な鬼才——三島由紀夫』　【中】唐月梅（著）　九州出版社

⑵『*The Life and Death of Yukio Mishima*』  【英】ヘンリー・スコット・ストークス（著） 上海書店出版社

⑶『生と死の弁証法：<潮騒>と<春の雪>の創作理念の相違点と共通点の議論』高瑞怡　雲南大学人文学院

**＜中国語原文＞**

**★一等賞**

**深夜·食味·小世界**

**华东师范大学　传播学院　施柯沁**

若试着评价一下安倍夜郎先生的《深夜食堂》，我会想起幼时外婆家的酱油浇饭：选用当季收获的新米，倒入农村特有的土灶慢慢地蒸，待到灶间白雾缭绕，米香四溢，我就会迫不及待地递上空碗，看外婆在雪白饱满的米饭里拌上一勺白亮亮的猪油，点上几滴酱油——深黑的酱汁渗入莹莹润润的米粒间，稻香，柴薪香，油脂香，发酵酱汁香悠悠然混在一起，仅仅是最简单食材的交汇，却俘获了懵懂的我最挑剔的味蕾。

开在新宿后巷的深夜食堂，营业时间为午夜十二点到次日七点，进门即可一览无遗的店面，小厨房被三面的桌台环绕，老板在屋中央周全地招呼每位来访的食客，食客们抬头就可以看见彼此的面孔，没有固定菜单，只要能做的出，老板都会满足。

林林总总读过些有关日本美食的书目，有北大路鲁山人的《日本味道》，有小川糸的《蜗牛食堂》，它们或讲述美食家关乎食物和人生的思考，或讲述个体在烹饪中体验生活的经历——《深夜食堂》是个例外，安倍夜郎先生在他小小的漫画格子里，以食物为牵线呈现了日本都市中一帮特殊的人物：普通公司小职员、黑社会大哥、小盗贼、脱衣舞娘……这些角色行走在社会灰暗地带，平淡无奇甚至为常人所不齿，但安倍先生执意去放大这些我们刻意移开视线的群体的生活，无所谓好恶良莠，是犹如白米饭般最简单的白描，调味着最本分的悲欢情仇，倒也有不同于山肴海味的醇香和多味。

曾在一部讲述日本大众食堂的纪录片里听受访者谈起：喜欢这种地方，因为这里有各种各样的人，和他们在一起会很放松。《深夜食堂》正是由一场场邂逅构成的：食物是极好的媒介，它使形形色色的人能够暂时抛开外在的身份，性别，年龄，仅仅依靠共通的味觉相知相识——阿龙是黑社会的大哥，小寿寿经营着一家同志酒吧，因为一次红香肠和鸡蛋烧的分享，他们的人生轨迹得以交集；阿龙每次都会点上一盘红香肠等待小寿寿，小寿寿喜欢和阿龙共享美味；阿龙受伤住院了，小寿寿更是特地为他送去最喜欢的红香肠。现代社会带来秩序的同时，或许也令都市人不得不为维持一种礼数文明而不自觉换上人情伪装，印象中的日本是一个强调人与人之间礼节的国度，我敬佩它的井然，却也担心这种习惯会无意间造成人群的情感隔阂，但那凝成在深夜小食堂里的不讲条件，无所顾忌的交际和信任，却令我深深动容。一面之缘产生的婚外情，中年“竹子一族”的忆青春，闺蜜间的情谊和背叛……宛如最朴素食材杂烩出了各色口感，恰到好处的距离感和口味投合的相逢，让聚集于深夜食堂的陌生人们卸下文明社会最重视的外在，相互倾诉，相互依偎，调味出酸甜苦涩更加杂味的生活，在鸡毛蒜皮的羁绊纠葛里，萍水相逢的人学会了坦率地说出心意，更加真诚地面对彼此，并互相扶持着走过生活逆境，这些邂逅不是英雄相见恨晚，不是感情的烈酒可以一饮而尽，而是文明背影中的烟火粗食，值得被掰开一点点细嚼，化作尘土之上最熟悉却最容易被忘却的人间绵长温情，细细温润每一位来此歇脚的过客。

《深夜食堂》也讲个体的故事，或者说，每一场邂逅其实就是个体在他人身上的一次自我观照。有人说，料理反映人心。刻在生命天赋里的本能让人们能够自然而然在进食时放下杂念，听任味觉的感知，来牵动记忆深处最初始的念想：“伦子最喜欢阿爸做的炒面！”即使父亲为了躲债已销声匿迹多年，女歌手伦子还是保留着幼年时父亲培养起来的吃炒面的爱好，在再次尝到熟悉的青海苔炒面时，终于无法回避自己内心深处对父亲深沉的思念；爱吃水煮蛋的毛利先生一直遮遮掩掩自己戴假发的事实，鼓起勇气向女友坦白，虽然惨遭分手，他终于明白自己其实也会不可避免地以貌取人，并接受了拥有光亮脑袋的自己；胖胖的真由美在最爱的燉牛筋和爱情的减肥计划里辗转，虽然爱情之神一直没有眷顾她，但靠着美食的慰藉，她依然活的率性而努力……如果将美食家渴望通过食材挖掘生命真谛的追求比作高僧般潜心出世的修行求道，那《深夜食堂》里的小人物更像是隐匿在喧闹尘世，嬉笑怒骂之间遍尝人间百味的行者，我喜欢日本文学里这些琐碎的日常，爱看那家常的一食一味，倒映出最普通人心底的小确幸和小烦恼，这些人走在社会底层，看过都市光鲜外表下的粗鄙，计较着基本的吃喝拉撒，却依旧不卑不亢，一边抱怨一边又坚强地去迎接下一个清晨，他们在大世界的街角默默无闻地生长，却又努力做着自己小世界里不可替代的主角。

安倍夜郎先生的过人之处不仅在他简明有趣的画风和妙趣横生的情节，更是他在人人都强调宏大叙事的当下，愿意代表大世界里的某些微小群体，安静地唱属于他们的歌谣，这是一种本于日本现实文化却又超越了文学固有国界的人本主义关怀，仿佛是坐在大院里听邻里街坊郑重其事地拉着家常，夹喜夹忧夹一点怜悯，诉说寂寞的都市个体在自己的小世界里寻求名利之外精神寄托的倔强。

如果有机会到访日本，请记得一定要去那深夜食堂看看，午夜十二点掀开门前小挂帘，那是繁华背后夜深忘情而不归宿的都市人窄窄的，最后的心灵归港。

注：阅读书目 《深夜食堂》 安倍夜郎[著]

## 人间无失格

**东北大学秦皇岛分校　语言学院　刘颖慧**

第一次读完《人间失格》，已是深夜。

我合上书，把它小心翼翼地摆到我的枕边，灭了灯静静躺下。辗转反侧，彻夜难眠。

读书算是我一个小小的爱好，可这是我第一次在放下书本后，没有如释重负的感觉，而是一反常态，精疲力尽。

我闭着眼睛，不只是出于狂喜还是出于恐惧，感觉胸腔中有一股炽热的力量就要喷薄而出，让我呼吸困难。那种感觉在我又拜读了两遍之后只增不减，以至于我现在在键盘上敲击这段文字的时候，双手还在微微颤抖。

太宰先生，想替你咆哮一番，大哭一场。

太宰先生笔下的故事，竟与我迷惘的灵魂世界如此契合，简直是我在笔墨间所遇到的最大的幸运。

《人间失格》是日本“私小说”领域天才作家太宰治的代表作，太宰先生的一生大起大落，多次想要结束自己的生命。《人间失格》中的主人公生活颓唐、多次求死的大庭叶藏的原型正是他自身，他就这样毫不留情地把烙印在自己身上的痛苦，血淋淋地呈现到世人面前。《人间失格》完稿一个月后，太宰与情人跳河殉情，留给世界一个还未讲完的故事。

“胆小鬼连幸福都会害怕，碰到棉花都会受伤，有时还会被幸福所伤。”

这是太宰先生在《人间失格》里留下的原话。不幸的是，不管是曾经还是现在，这种悲伤到几近绝望的笔调为世人所不齿。可正是这句话，让我痛彻心扉。太宰先生生于名门，身为家中幺子，他承受着常人难以理解的压力。可笑的是，这种压力不是来源于别人，正是他的家人，他的至亲。正如书中所言，仅仅是一个吃午饭的光景都能让叶藏不寒而栗、寒战连连。长期的压抑生活让幼小的叶藏彷徨无措，如同生在炼狱一般。他卑微脆弱，因为生活是如此沉重不堪。他恐惧人类，却也无法对人类死心。于是他选择用滑稽的言行来向人类进行最后的求爱，成了戴着假面的跳梁小丑。

因为是小丑，人们无法看到他内心深处淌的泪水。他的悲哀恰恰是别人的笑料，哪怕摔断了手脚磕破了牙齿，也要挤出夸张的笑脸。他除了用滑稽武装自己之外，别无选择。

因为是小丑。

没有人知道，笑面背后藏着的心早已支离破碎，那种被光怪陆离的世界笼罩的不安不是谁都能懂。因为受了太多的致命伤，所以他变得逃避，变得怯懦，变得虚假，变得怠惰，变得沉沦。他把自己活成了一个令人扼腕的人间悲剧。孤苦伶仃，颠沛流离，浑浑噩噩，避开了猛烈的狂喜也避免了悲痛的来袭。于是人生像被包了一层纸，模糊不清，看不到本来的面目，所以谈不上幸福，也谈不上不幸。换句话说，只有最可怕的平庸。

没有任何人愿意变成这般可笑的样子，何况叶藏也有梦想，也辨是非。所以，当他被折磨得面目可憎的时候，这个世界有罪！

而世人是最苛刻的生物，不能包容所谓的一切阴暗面，仅仅对书中内容浅尝辄止就把自己放在了道德的制高点。当然，也并不打算自省。世人打着“正义”的旗号对太宰先生声讨诛伐，说他是疯子，笑他无病呻吟，批判他内心阴暗，感慨他不堪一击。这就是世间，不能容忍任何污点和罪孽。难道我们只能接受象牙塔吗？难道我们只能去爱皆大欢喜的枕边童话吗？难道我们每个人都没有罪孽，每时每刻都光明磊落吗？难道世界不可以存在悲哀吗？难道我们扪心自问都能问心无愧吗？

我们都知道，每个人只是把黑暗面藏起来了而已，用光鲜亮丽的外表制造出一个至善至美的假象，进而抨击别人的真实并乐在其中。

世人啊，为什么总是如此残酷？

而所谓世人，不正是我们吗？

世间最多的，不过是道貌岸然的伪君子，而这种人，最逢迎也最容易存活。于是，有罪的继续逍遥，单纯的总在忏悔。恶人假装朝圣，圣人坠入尘土。就是绝大多是自恃清高的世人，把真正的人性逼到了角落。

我不禁感叹——这是一个何其颠倒的世界啊！

太宰先生让我懂得，在崎岖的世界里发现真相，根本不能随波逐流。

叶藏的人生是可悲的，多次自杀，为至亲所抛弃，为友人（或者说狐朋狗友）所嘲笑，最后在破旧的茅屋里度过余生。可是他真的这么一无是处吗？在文章最后，老板娘对叶藏如是评价：“我们认识的小叶，个性率真、幽默风趣。只要不喝酒，不，就算喝了酒……也是个像神一样的好孩子。”

因为是神明，所以无法救赎自己吗？

这才是《人间失格》的真相，太宰先生想要传达的是“罪多者，其爱亦深。”可是，很多人被书中描写的叶藏的罪孽一叶障目，不懂先生对世人爱得深沉。他在荆棘中温柔地开出了花朵，又在世间的繁重大爱中凋零。

生于和平年代，我们不能自以为是地强迫别人成为勇者。我们不是太宰治，也注定成不了太宰治，所以也不要期待太宰治活成芸芸众生的样子。无端怀疑先生的人生，不过是庸人自扰。何为高尚，何为浅薄，时间会证明一切。有人须臾，有人不朽。

我坚信先生是满怀爱意告别凡尘的。他这一生，该爱的都爱了。该还的，也都还清了。在他的最后一刻，一定会对生命释怀吧。所以才会给世间留下美好的临别赠言——

“不要绝望，在此告辞。”

这是独属于太宰先生的洒脱，无需惺惺作态的悲悯，亦无需虚情假意的挽歌。

好，那让我们笑着告别——

先生，一直以来承蒙关照。

愿你在云之彼端，摆脱枷锁，自由幸福。 参考：《人间失格》

**风中有音，沙上有印**

**大连海事大学　信息科学技术学院　郝颜**

　　迟疑了很久，才落下这略显生疏的笔。总觉得读了那么些文字之后，心之所思，情之所向，不由笔尖倾洒记录下来，有点不甘。和书墨接触的柔软清脆仍回荡在每一个静心阅读的雨天，深夜。嗯，那声音遗落在风中，从未走远……

　　不知道自己的感情随不随大流，大概有点特立独行。但我愿以最真切的语言展现读东野圭吾小说的感受，也许没那么透彻，却是我以自身阅历所能理解之至。

　　某天，拿起《嫌疑人X的献身》，向来逻辑思维不强却推理热情高涨的我，自此翻开了读东野圭吾著作的篇章。那不是大部头，却以极具条理的章节塑造出一个痴情汉形象。简短的对话和粗线条勾勒的场景当真将我引进了日本，那同样有着贫民窟的旧江户地区。那里有相依为命的母女，有心思缜密、感情匮乏的数学老师，也少不了极具犀利目光和高超头脑的侦探。我认为这些是构成推理故事的肉体，其灵魂即是人物错综复杂的关系、充满悬疑的命案及侦破的坎坷过程。还好，这里主人公间关系并不复杂，甚至说不上有何等联系。仅仅是母女初来乍到拜访时闪现的干净眼神让男主重新燃起希望。在常人看来，一次普通相会能撞出什么火花呢？我想所谓的情不知所起，一往情深也不过如此吧！女主是不幸的，遭到前夫的骚扰纠缠，但她无疑是幸运的。在失手造成命案后，有邻居的援助。但她哪里知道这不仅是邻居，更是爱她胜过自己性命的保护神。石神能如此严丝合缝地制造另一桩命案掩盖此桩命案，实属不易。可惜再完美的谋划也终有破绽，通过他对着玻璃门撩弄头发和无名氏消失的细节，真相终告大白。也许这也是东野君小说的魅力所在，其中包括天网恢恢，疏而不漏的法理。从故事本身我领略到世间的真爱，浩瀚如海，讳莫如深。风中飘有爱的音讯，沙上刻有眷恋的印迹。

　　除了男女之情，流露在其作品中的还有普世之意，济人之善。《解忧杂货店》中颇具穿越性质的桥段确是一大亮点。浪矢老爷爷帮助迷途的人们解除烦恼，并且经过一系列神奇的效应，在破旧杂货店上演了一场旷世绝伦的救赎。一个孤儿院串起了一段段故事，凑出了一片时光胶囊。浪矢爷爷为茫然的人指明方向，留给世界一片美好。风中有音，信中有情，不忘初心，方得始终。

　　人分善恶，道法自然。正如《恶意》中影子作家谋杀比自己出名的真正作家，这就是社会的败类了。不管是什么苦衷，都不能做出如此恶劣的行径啊！但仔细琢磨，二者本都怀着恶意，一个以对方把柄要挟，一个心藏灭口动机。两种恶意相互碰撞，自然会演变成不可挽回的悲剧——双双步入不归路。人是一种贪婪的动物，也是一种虚荣的存在，两相咬合，道义灭绝，黑暗涌动，劫难四伏……

　　后来读东野圭吾作品中的无冕之王——《白夜行》，深受触动。我把这本书的内核归结为恶。动听的名字雪穗恰如她刻意习得的高贵气质，然而那也恰好反映了她极度的虚荣心，她背后到底藏着多少真相与晦涩，我说不清楚……不曾料想天底下竟然还有如此肮脏的交易，为了钱，母亲不惜把女儿往火坑里推。包括雪穗害死母亲，都体现出人性之丑陋。而桐原为保护雪穗，亲手杀死自己的父亲。这样，失去家庭温暖的二人，为掩藏罪行，用尽手段斩除亲人朋友。一幕幕谋划，一桩桩命案，一拨拨生意，投射脑海，惊叹不已。他们的心到底有多狠，野心到底有多大，心机到底有多重，我不知道。我只知道那是被残酷的生活扭曲而成的伤痕累累的绝望的心。只希望能手牵手在太阳下散步，这个象征故事内核的绝望念想，有如美丽的幌子，沿着无数凌乱的行径一一还原:通篇没有两人面对面的真情流露，没有海枯石烂的誓言，最后只剩下一个冰冷绝望的诡计，映射着雪穗伪装的温柔和桐原在暗处的阴郁。在亮司从楼上跌地而死，雪穗头也不回踏上扶梯的那一刻，我知道，连那最后的一丝温情也零落成泥碾作尘。最后也稍能理解雪穗的自白:我的天空里没有太阳，总是黑夜，但并不暗，因为有东西代替了太阳……他们的背景夺走了他们的光明与希望，可怜亦可恨。其中展现了最绝望的念想，最悲恸的守望。也正是这抹念想，这段素净却注定无法实现的爱情，东野圭吾才保留了日本文学一向迷恋的永恒悲伤。风中有音，是悲切的呻吟；白中有夜，是悲戚的终结。

　　东野圭吾的小说折射出了日本侦探小说的突出特点——科普性很强。查找小说背景后，深感他的知识面及对时事的把握太过强大。他对现实的思考和变通，反思与应用能力实在高超，值得我辈学习。

书如人生，品书亦是品人生，一本书就演绎了一场源于生活又高于世俗的百变人生。各种酸甜苦辣，如人饮水，冷暖自知；其间美丑善恶，心中有秤，洞若观火。风中掠过飞鸟的翅膀，却不留下一丝痕迹，但那声音告诉世界，它已飞过；沙漠映射着骆驼的影子，虽被夜的黑淹没，那串印迹在示意后人，它已走远。不一样的人有不一样的人生，或悲或喜，但既然生而为人，为何不活得痛快些？就算痛也要快乐着，因为反正不管怎样，到最后大家的结局都一样。选择爱与美，岂不活得更有价值些？至少在老年回首往事时，能听到自己留在风中的声音，望见留在漫漫泥沙路上的印记，岂不快哉？

嫌疑人X的献身，东野圭吾，南海出版公司，2014年

白夜行，东野圭吾，南海出版公司，2013年

**海坂藩的土地**

**北京大学　对外汉语教育学院　崔言**

江户以北一百二十里，有一个俸禄额度为七万石的小藩，名曰“海坂”。三面为山，一面为海：南为伊波山（《乖僻的新左》），西为波切山（《冤罪》），北为荒仓山（《相模守无害》）。

城堡坐落在城中的大河“五间川”以西，城中各处的人们只要抬头就能望见美丽的天守阁。五间川岸边，茂密的樱花树和柳树掩映着刀光剑影。在这一带，岭冈兵库曾遭暗杀（《暗杀的年轮》），石桥银次郎曾与两名剑士交手（《秘太刀马之骨》）；而牧文四郎曾护送阿福与其子乘船顺五间川而下，躲避里村家老一派刺客的追截（《蝉时雨》）。

 若想寻欢作乐，花街染井町以美酒和美女而知名；若想饱啖美食，三屋清左卫门会光顾花房町名叫“涌井”的小店（《三屋清左卫门残日录》）；而清贫的井口清兵卫匆匆在初音町买了豆腐和葱（《黄昏清兵卫》），赶着回家做饭。

 时代小说家藤泽周平以这个架空的北国小藩为背景创作的一系列小说，后来被称为“海坂小说”，成为其代表作。如向井敏将小说评论汇成一册，名之为《海坂藩的武士们》；同为著名作家的挚友井上厦更在其葬礼上读了题为《对海坂藩的感谢》的悼词。

 “海坂”这个名字，其实先于“藤泽周平”而存在。作家本名小菅留治，原是汤田川中学的一名教师，因罹患肺结核入院治疗。病友向他介绍了俳句杂志《海坂》，并鼓励他投稿。“站在海边眺望大海，水平线画出一道平缓的弧线。听说那若有似无的弧度称作‘海坂’。真是美丽的词汇啊。”（《小说的周边》）“うなさか”是一个相当古老的语汇，在《古事记》中，出现在海神的女儿丰玉姬复归海国的场景，汉字也作“海境”、“海界”，指凡人与海神之间的界限。

在当时，肺结核是重病，疗养所不啻为划分生与死的界线。即便痊愈，病人也往往很难顺利地回归社会，小菅留治重归教职的申请被拒绝了。不过，疗养期间他勤于写俳句、读文学，为日后的作家生涯奠定了基础——越过那海天交接的弧线，或许是一个崭新的世界吧。与死相伴的无常人生、病友相互扶助的美好、复归社会的微渺希望、开始写作的念想，皆蕴含在“海坂”之中。

 他在随笔中写道，海坂藩其实是以江户时代自己家乡一带的庄内藩为原型。海坂小说中不断出现庄内的菜肴、方言、风土人情，为这虚构的藩地注入了现实性。“加入如实性，也就是现实感，并不会将故事的虚构性冲淡。”“人被社会、家庭、血亲的纠葛所束缚……我的小说的主人公也正由于被赋予了种种制约，因而能在虚构之中现实地活着。”（《重读自作——隐剑系列》）。

那么，既然追求现实性，为何要虚构这样一个藩，又或者，为何不直接写现代小说呢？作家自述道，欲写今日人情，时代小说最好；现代小说的话，自己会因害臊而无法下笔。另一方面，时代小说也不能是完全的空想，若和现代毫无联系，就会变得陈腐不堪（1992年接受冈崎满义采访时语）。

在这些陈述背后，是作家对“距离”恰到好处的把握。也即，由于当局者无可避免地会心生迷惑，需要隔开一段距离方能从容地书写；但又不能过于疏远，否则会沦为空想，也难以与现代的读者相通。

诸多读者和评论家都将海坂藩视为藤泽周平所创造的“日本人心灵的理想乡”（井上厦、松田静子、杉本章子、关川夏央等），这种评价对一个偏处一隅的北国小藩似乎是相当不可思议的。更何况与一般意义上的乌托邦不同，海坂藩处处是现实的束缚，小说主人公主要是下级藩士，并且不是继承家业的长子，而是前途灰暗的次、三子，此外还有步入暮年的隐退者，贫苦的小户女子……

然而，真正丰饶的土地不正是如此吗？不是仅仅生产单调的幸福、书写胜利者的历史，而是孕育多样化的生活。这些处于底层的人物是最为贴近大地的，虽然背负着命运的枷锁，依旧能保持与贯彻自我的意志，诚实地生活下去。秋麦沉沉，冬雪皑皑，春花灿灿，到盛夏，从巨树的枝叶间迸发出激烈的蝉鸣声，这饱含生命情感的呼喊历经四季风霜，方显得格外清亮、高亢。

令读者心生向往的，不是一两个完美的人物、几段功成名就的传奇，而是这方深厚蕴藉的土地。跨过古今的间隔，穿越虚真的界线，伸手从书页中掊起一把海坂藩的泥土，可以嗅见其中隐隐散发着人生哀乐的清香；指间由岁月流年打磨出的质感，教人肃然，又怅

**生命之优雅的犯禁与高贵的出格——读三岛由纪夫《春雪》**

**上海交通大学　安泰经济与管理学院　邱舒怡**

 实际上，我只真正通读过《丰饶之海》四部曲一次，但是读了很多遍首部《春雪》。因为我感觉，在知道了故事的后续发展情节以后，对一次又一次生死轮回和擦肩而过这类悲剧的直接阅读的接受感反而不如从《春雪》的只言片语中窥出些许悲凉痕迹的那种隐藏着的忧伤之情来的优美。

其实单从“春雪”这个非常有日本文学“物哀”特色的标题就可以看出了，春花秋月夏雨冬雪才是符合四时之变的“节物”，雪之于春天，本身就是格格不入的，所以这本身就是一个讲述因为发生于不该发生之时而不敢见光的爱情的故事。正如主角松枝清显所说，“他不知道他们的爱情究竟是从没考虑“终了“而开始的，还是正因为考虑到了”终了“才开始的”。春天的雪，正是清显和聪子飞蛾扑火的爱情，从标题开始就透露着一种纤细的悲壮。以弱小的身躯去对抗无法战胜的强压或集权唯一的方式只能是偷偷地越过冬春的界限，以一瞬而逝的消融以示自己不被季节支配的自由，正如故事中的清显与聪子，在聪子与皇族订婚之后方才下定决心互相表露心迹坠入爱河，却丝毫没有偷情的肮脏与龌龊之感，却展现了生命终于冲破了重重桎梏，踏过边线的优雅姿态，这就是清显所感受到的那种感觉了：“所谓优雅，即是犯禁。“而在作出犯禁和出格行为的一刹那，不管是恋情还是清显与聪子本身，都背负了从人世间夭折的宿命，所以在最后，这对有着平安时代风雅之恋的恋人，一个削发为尼遁入空门，一个早早夭亡黄土白骨。

这就是三岛式的美学理念吧：美之所以有打动人心的力量，是因为其与消失和死亡如影随形。就好比蜷川实花的电影《樱花乱》中，花街入口处门上的玻璃鱼缸里的金鱼，很美，但是一旦跳出鱼缸就只能死去。三岛惯于将美与踏出“生”所划出的边界而造成的消逝捆绑在一起，也因为这样美带上了悲壮感，而最终的消亡带上了美感，这从他最有名的那一部作品《金阁寺》就可以看出了，金阁有着夺人心魄的美，但是只有在最后被一把大火焚毁的时候那种从“完整”跨越到“毁灭”的带着妖冶和残忍的美感才在文学史上留下了浓墨重彩的一笔。

这种美学理念在日本文学的历史上可以说是一脉相承，平安时代的伟大作品《源氏物语》中，光源氏公子四处偷欢，与妙龄少女，甚至与有夫之妇。爱情的虚无缥缈在一次又一次地对于礼法的越界中显出一种揪人心弦的美感。而在《春雪》中，清显在一开始聪子的示好之下优柔寡断，没有勇气去接受这份爱情，却在聪子与洞院宫订婚之后才意识到自己对于聪子的爱意而回头追求，命运和心意的无常造成了堪比《茶花女》的擦肩而过和阴差阳错，而正是因为这种纠结和痛楚，才更加突出了他们在婚约之下的那些偷偷摸摸的约会的惊心动魄，正如题目而言，这是一种为了爱情而奋不顾身的，优雅的犯禁与高贵的出格。

清显毫无疑问是充满了实施这种行为的气质的，他纤细、敏感、甚至因此而有些多疑，总是有各种各样的梦，甚至写了一本他自己的“梦日记”，他幻想自己死亡之后灵魂漂浮在棺材上俯瞰自己死去的肉体……三岛由纪夫后期一直在疯狂地追求一种肉体的健美和雄性的健壮气质，也因为这个他一直在健身，并且留下了一套十分有侵略的力量美的影集《蔷薇刑》，但是这样的一位作者却在他的最后一部作品之中塑造了清显这样一个优柔寡断的充满少年感的男性形象。我想，他或许是在通过清显这样一个角色来寄托自己另一个感情丰沛而纤细的人格，而赋予人物这样一个人格的同时，也在通过清显的那种出格来完成了自己目前所不敢完成的越界。在后面的《奔马》《晓寺》和《天人五衰》中也是同理，比如《奔马》中在红日面前剖腹自杀的少年勋，而在现实中，写作完《天人五衰》之后，三岛也做出了与勋一样的激进行为，他通过一次又一次重生又一次又一次越界而死的“清显”，阐释了那种在真实生活中人们所不敢为的“犯禁”和“出格“所包含的残忍的美感。

这就可以回过头来说整个系列的名字了——《丰饶之海》，对于这个“海”，许多人有许多的解释，有些说法认为是人的丰富的情感，但从三岛由纪夫在四本书中想要通过故事与纠葛阐述的那种生死轮回的东方哲学观来看，“海”是“生命”的象征这种说法可能更加合理。在作为线索而存在的本多眼中，清显在四部书中以四个不同的身份存在着，永远都活不过二十岁的年轻生命在人间徘徊而无法突破，每一次的死亡是他一次生命的终结，通过触犯禁忌而获得生存的实感，而在获得之前所无法体会到的青春与活力不久之后，就通过“死亡”的方式消逝了，但是他却没有办法逃脱人世，也即“生”的“海”。而与他相对的，聪子在恋情不得不终结的最后，选择了另一种从尘世的死亡——落发为尼，并且在系列的最终否定了清显的存在，粉碎了本多揣着的60多年的梦，她象征的就是虽生却死的那一类生命突围者，以尘世的死亡为代价脱离了轮回而存在（相对于清显的四次“转世”）。

三岛由纪夫的美学观念在这本书里非典型地展现出了一种风雅而纤细的风格，但是不变的是那种他在文字中一直在探寻的人生之优雅的犯禁以及高贵的出格。

阅读书目：

《春雪》【日】三岛由纪夫 著 【中】唐月梅 译 上海译文出版社

参考文献：

⑴《怪异鬼才——三岛由纪夫》 【中】唐月梅 著 九州出版社

⑵《美与暴烈——三岛由纪夫的生与死》  【英】亨利·斯各特·斯托克斯著 上海书店出版社

⑶《生与死的辩证法:论<潮骚>与<春雪>创作理念的差异与共通》

**★二等奖**

**发现不起眼的存在**

**華東師範大学 物理・材料科学学院 向臻**

我一直觉得日本是一个神奇的国家，因为日本人总是会关注于细微的事物，无论有多么不起眼。

 一年四季中，最不起眼的大概就是杂草吧。没有艳丽的色彩，没有让人停驻的芬芳，虽然种类数以万计，但是没有人想知道它们的名字，就这么作为陪衬，挤在花丛里，石缝里，在田间里还会被人拔去，没人知道它们何时发芽，何时衰败。

 但是，一个日本人却对一年四季的杂草情有独钟，写了一本书叫做《杂草记》。

 很偶然的一个早晨，去图书馆时，LED屏推荐了这本书，大概就是被那寥寥几字的简介触动了吧，“只要认真观赏，再不起眼，再无趣的植物都蕴含着生命的坚韧和美好”120幅手绘的杂草，配上作者的科普，真的让我发现了杂草世界的奇妙。

 比如，日本人对杂草取名的随意，阿拉伯婆婆纳开着粉色的花穗颇为可爱，却因其形状酷似狗的阴囊而被取名为大犬阴囊，类似的还有簇生卷草被称作耳菜草，鸡矢藤被称作屁粪葛。当然，日本人也会将杂草的名字取得独具和风情调，紫斑风铃草就被取名为萤袋，由来的缘故是从前还有很多萤火虫的时候，孩子们会捉来放到它袋状的花朵里；也有传说它在流萤时节开花的，当然，还有石蒜被称作彼岸花，顿时平添了一种清冷的感觉。作者也发现了杂草的某些品格，这或许就是杂草很可爱的地方吧。“秋之七草”中的瞿麦，日文名为河原抚子，河原抚子总是给人纤弱之感，但习性却是十分顽强的，它的别名大和抚子正是千百年来日本女性的别称，她们看似柔弱纤细骨子里却相当坚韧，这名字确实很贴切。相似的还有刻叶紫堇，茎上没有绒毛，纤细得仿佛指头用力一夹就会断掉，被雨一打就会倒伏在地，待天晴又会重新站起来，看似弱不禁风，实际上非常强韧。

 不仅仅只是杂草，日本人也喜欢发现普通人身上的闪光点。我最爱的一档日本电视节目叫做《月曜夜未央》，这档节目里主要以采访路人为主，他们没有明星那样精致的长相，就只是作为我们印象中的路人甲，却成为了这档节目的明星，印象特别深刻的就是桐谷桑，他主业炒股，坐拥两亿日元的资产，六十多岁却还是独身，生活在一个脏乱差的公寓里，因为炒股，他可以拿到很多优惠券，所以他基本就靠着优惠券度日，每天飞快地骑着女士自行车穿梭在各个可以使用优惠券的地方，偶尔还会发生车链子掉了的窘态。日语里有一个词叫做"一生悬命"，大概就能很好地概括桐谷桑每日的状态吧！如果没有月曜夜未央，或许只是觉得桐谷桑只是一个自行车骑得特别快的人吧。因为这个节目，发现了形形色色的日本人都过着自己独一无二的生活。有经营着快倒闭的居酒屋，往鼻子里塞硬币招揽客人的妈妈桑，有用马克笔化妆的，不认识呐喊这幅画的老爷爷，有一群热衷于稀奇古怪发明的日本人。他们每个人都有自己的想法，有老爷爷每周都要去迪士尼，也有一群老年人组建了即兴表演剧团，也有少年热衷于买各式各样的吸尘器，这些都是会让他们感受到幸福的事情吧，也不会在意其他人的想法。正是这些普通人，才会让日本社会这样井然有序的运转着

 一直以来都对日本文学，日本文化情有独钟，大概就是日本人发现的很不起眼的小细节都会让我触动吧！我一直都觉得自己的人生很平淡，是一个不折不扣的普通人，老老实实地完成义务教育，老老实实地考上大学，相貌就像杂草一样吧，但是渐渐我发现我也拥有自己的宇宙。我喜欢着我所喜欢的事情，我喜欢简单而纯粹的东西，比如星空，油画，音乐会，当然还有日本文化，一生悬命地活着，靠着自己喜欢的东西充电，偶尔会自卑地嫌弃自己一无是处，偶尔又会自信地认为自己无所不能。我也是这样平凡而又独特的存在吧！就像这浩瀚的宇宙，总是会留着一个位置给我。

 盛夏快要过完的时候，回到学校，夏季是杂草长得最茂盛的季节，草丛里满是雌日芝，狗尾草，还有马齿苋，我见到它们总是会向它们投去微笑，心里想着我们都是平凡而又伟大的存在吧！

阅读文献：《杂草记》柳宗民

**思无邪**

**同済大学 外国語学院 呉沁霖**

 子曰：“《诗》三百，一言以蔽之，曰：思无邪。”书名大抵出于此处。

《思无邪》是我今年夏天遇到的最美的一套书，共有两册。以往与《诗》相关的书籍，多是按照《诗》原有的分类方法，由“风”、“雅”、“颂”三部分至诸如“周南”、“邶风”，再至《关雎》、《静女》这样的具体诗作。而《思无邪》并非如此。它依据《诗经》中出现的风物分为“植物卷”和“动物卷”。硬面装帧柳染绿的一册为植物卷，亚麻色的腰封上落着一株玫红的木瓜花；另一册薄红底色上，竖排墨黑烫金的“思无邪”三个大字灵动秀气，腰封绘有双燕双飞。全书从装帧到封面，再到内页排版，清新淡雅，恬淡素净。两册书一红一绿却相得益彰，和睦协调，还有着和风的古朴典雅，甚是引人喜爱。

倘若仔细寻找会发现《思无邪》与其他书还有许多不同，譬如它没有版权页，也没有人作序跋。它只是将江户时代细井徇先生《诗经名物图解》一书中的插图整理，重新排版，余下的就是忠实地向读者呈现画作，再配以程俊英先生的译注，左图右书，一画一诗，再无杂物。在品读此书时，无疑我更熟悉了《诗》，同时我也窥见了一个我曾不知的日本。

何出此言？

先由细井徇先生的画看起——稍许泛黄的宣纸上，是不盈顷筐的“卷耳”，是浓艳漂亮的“唐棣”，是双宿双飞的“鸳鸯”。这些插画构图灵动多变，笔触精到，着墨巧妙，先生笔下的动植物可谓是惟妙惟肖，栩栩如生。《诗》的采集与编辑成于春秋时代，此后千年对它的研究不乏佳作，可我却是在一位日本学者的书中第一次见到丰富的诗经名物图集。在读《诗》的时候，正如朱熹所言：“解《诗》，如抱桥柱浴水一般，终是离脱不得鸟兽草木。”有人说：“雎鸠，是离爱情最近的鸟；蒹葭，是离爱情最近的草”，可我每每读到《蒹葭》，脑海中只有一个模糊的影像，白衣姑娘的裙袂被长长的芦苇所遮掩，空中或是水中央有着我叫的出名却看不真切模样的鸟儿。《伯兮》一诗中有这样一句“自伯之东，首如飞蓬。岂无膏沐，谁适为容”，讲的是女子思念远征的丈夫，终日恹恹倦梳裹，鬓发三千散于肩。无疑我们能通过乱发想象“首如飞蓬”，可我竟不曾追问一句“飞蓬是什么样子”。是《思无邪》，是细井徇让我看清“雎鸠们”的模样，得以品味一个更清晰生动的《诗经》。

我看到的日本学者在做学问时，很能“钻进去”，很擅长剖析问题。我曾经拜读过宫崎市定先生写的《中国史》，从经济的角度切入，十分的新颖。我第一次知道一位外国学者竟然能比绝大多数中国人还要了解中国古代的政治制度和经济演变。我也曾听到有人说，中国古代史的部分研究，日本学者做的比中国学者还要到位。当时我还以为只是夸张，而今日我可以相信这句话的真实性。为何？首先，或许“不识庐山真面目，只缘身在此山中”。当日本的学者从诗经中寻觅出我们看不真切模样的动植物并用笔触描绘下来，从盐米之中看一个王朝发展的轨迹，而我们以中国人的目光回眸自己国家的历史，则很可能被一些“习以为常”和“先入为主”蒙蔽了双眼，从而看不见藏在角落里的重要信息。再者，不得不承认，日本的学术界比当今中国更加纯粹，或者说很多日本的研究者更能全心全意地扑在自己的课题里。他们不理会外界的声音，无心关注自己的社会身份和政治地位，只是专注地——像呵护着孩子一样，关注自己所研究的事物。正因为如此心无旁骛，他们才能愈研愈精深，愈研愈广阔。这股耽于学术的风气正是我们以后做学问所需要的。

日本有许多汉学研究著作，《思无邪》便是其中之一。早至乐天的诗歌大量出现在日本文学作品中，近至日本教科书中仍在教授中国的古文，日本对于中国文化的研究像是没有中断过。日本人在学习外来文化的时候总是极其虚心，不论是儒学、汉学还是此后的兰学，日本人不畏惧接受，也能够很好地“拿来”而后为己所用。中日有着悠久的交往历史，而中国对日本文化的了解，从深度到广度，现在还远不及他们对我们的了解。《诗》有言：他山之石，可以攻玉。何日我们能再多些不是泛泛的，而是用心的，令人眼前一亮的有关日本的著作，那或许能佐证中国文化软实力的强大。

不禁反思：我曾经接触到的是日本的什么？是它制作精良的手工艺品，是偶像组合、动漫及其衍生的文化，这是最多的；是平安时代的风花雪月和战国时期的万丈豪情，是《徒然草》的宁静淡泊和《武士道》的坚毅忠贞，这是其次。日本善于输出自己国家的文化，激起人们的热血或是引起人们对它的眷恋。我为之痴迷，但是正因为不断的“接受”，才易忽视这些文化的创造者和他们创作时的样子。这次我寻觅到了新的‘‘日本”，那是与中国联系紧密的日本，也是一个对待学术态度严谨的日本。我认为《思无邪》是美的，不仅因为这套书的编辑排版，更因为我看到了一位喜爱，苦心钻研中国文化的学者，看到了一个珍视他国文化的国家。文化纽带最美的形态莫过于此。

思无邪。让沉睡在历史中的“歌谣”，通过现代人的“歌声”，通过文化的纽带，传向更远的天空。

注：《思无邪》 <日>细井徇 绘，程俊英 译注，上海古籍出版社

**哀怜欲往何处去**

**東北財経大学 財政税務学院 徐紫雲**

火车，即将罪人送往地狱的火之车。《百鬼夜行》之中篇·阳卷——火之车篇中这样描述道：生前多为恶事之人，在葬礼的途中会突然刮起大风雨，这时有一浑身燃烧着火焰的妖怪掀去棺盖，将其尸首掳往地狱。

宫部美雪的《火车》以此为题，讲述了一个“恶女”的故事。新城乔子为了躲避追债人而杀害另一名女性关根彰子，顶替她的身份继续活下去。正要结婚之际却发现彰子在几年前曾因为无力偿还信用卡债务而申请过个人破产，乔子害怕真实身份暴露，再次开始了逃亡。

“火车今日过我门，哀怜欲往何处去”此句取自《拾玉集》慈元和歌集。文中作者借邻居之口吟出这句诗，以感慨两名女子拼尽全力也无法改变其轨迹的命运。彰子和乔子，两人乍看并无相似之处——一个是被害人，一个是杀人凶手；一个是浓妆艳抹的陪酒小姐，一个是沉着温婉的公司文员；一个相貌平平，只身离开故乡想要在灯红酒绿的东京立足，一个美丽知性，仅想有一处安身之所握紧手中平淡的幸福。

“迎面驶来的火车……说不定是命运之车。关根彰子想要下车，她已经下过一次车了。但是现在想要顶替她的女子，不知这情形，却想要叫住火车。”两位截然相反的女性，身影却因为这命运之车逐渐重叠。文中乔子的父亲是一个普通的上班族，泡沫经济时受周围的鼓动贷款买了房子，待泡沫破灭时却无力偿还房贷。还在上高中的乔子因此不得不辍学逃跑。追债公司拘禁了乔子的父母，逼迫他们做苦力还债致其不堪重负病死后，刚刚结婚的乔子也被强迫做应召女。而彰子，同事是这么描述她的：“她没钱，没学历，没什么特长，就连长相也不是美得能够靠它吃饭，头脑也不是很聪明，只能在末流的公司做些事务工作。这种人心中总是描绘着从电视、小说、杂志中看见的富裕生活。梦想无法达成，却又不甘心就这样放弃。所以会有一种达成梦想的希望，并沉醉在这种感觉里。”

这些外部灌输的信息如同一个小小的转辙器，诱导平稳行进的火车开往危险的坡道，开向腐朽的木桥，开向桥下的悬崖峭壁。

当“我”每天看着电视小说中描绘的纸醉金迷，不禁心生羡慕：这会是将来的我吧？可是看到周围人日常生活中的柴米油盐，又会感到失落：也许这才是我吧？

当“我”被公众号和成功学的书籍所鼓动，深信一举成名似乎毫不费力，跃跃欲试想要复制他们的成功之路时，踌躇满志的幻想：这会是将来的我吧？可当“我”看到父母结束每天重复的工作，一脸疲惫的回到家中时，“我”又有些茫然：也许这才是我吧？

幻想与现实产生了冲突，“我”心理上开始无法接受这样“平淡乏味”的人生。于是“我”开始整日向往诗和远方，追寻求而不得的幻光，背井离乡以逃离现实。“我”想寻求一个安身之所，但由于一次支付不起高额的房款，只好被每月沉重的还贷压力压得抬不起头。工资要用来偿还固定的贷款，日子便开始过得紧巴巴的，稍有意外支出当月就入不敷出。这时，铺天盖地的信用卡广告包围了“我”。无差别过度授信使我尝到了甜头，“我”开始借一张卡还另张卡。最后都无法偿还本息时，“我”不得不转向门槛更低的高利贷，进而一步步滑入深渊，万劫不复。

这样的“我”并不仅仅出现在八十年代末泡沫经济时期的日本，他们现在仍出现在新闻里、出现在周围人的议论中、甚至就出现在我们的生活中。“我也不知道为什么会欠这么多钱，我只是想要变得幸福啊”这是彰子的心声，同样也是他们的心声。在欲望鼓吹的巨大泡沫中，金融市场虚幻得如同现实社会的“影子”，消费者信用的异常膨胀使人只看到色彩斑斓的泡沫，却看不到泡沫破灭时潜藏的危机。彰子，还有无数个同样追寻幸福幻像的人，被告知“蛇是可以长出脚的”，于是一次又一次拼命地蜕皮。当她们疲了、累了、开始怀疑了，又有聪明的蛇卖给她们可以照出自己有脚的镜子，于是有些蛇不惜借钱也想买到那镜子。

彰子和乔子，她们并不单纯是一个脸谱化的屈服于欲望的失败者，或是不择手段想要生存下去的恶人。她是一个想要将父母葬在一起却因借不到钱买墓地，只能把骨灰寄存在寺庙的心碎女儿；她是远走他乡却一直念念不忘童年埋在学校里的十姊妹鸟的孤独少女；她是会做省钱的炒饭，把心仪样板房的照片珍藏起来，只想有个自己的家的平凡小职员。她是被引至欲望牢笼中的困兽，那些虚假的信息将她推入此深渊，待她挣扎着想逃离时又冷眼旁观。她是城市机器超速发展的牺牲品，最终被冰冷的钢筋水泥分食吞噬。她是你，是我，是这芸芸众生的化像。

最后，警察找到了乔子，小说以他的一段内心独白结尾：“其实我见你，是想听你说自己的故事。你之前没有告诉其他人的故事，你一个人承担的往事，你逃亡的岁月，你销声匿迹的岁月，你一点一滴累积的人生故事。”和警察一样，我无法谴责乔子。若不是被夺去阳光，又何必凝视深渊?若不是因走投无路，又何故立于危墙?今天乔子被带上火车，无论她如何挣扎也改变不了它的轨迹。明天，火车还会驶向下一个人。

“美丽的火车

 孤独的火车

 凄苦是你汽笛的声音

 令人记起了许多事情”

 而这载满虚幻欲望的火车，最终会驶往何方呢？[[2]](#endnote-2)

1. 注：

「海坂もの（海坂藩を舞台とした小説）」の範囲は定義により異なります。『海坂藩大全』には「海坂藩」、「五間川」、「染川町」のいずれかが明記された作品が収録されており、阿部達二は3つのやや厳格な判定基準を採用していますが、向井敏は藩名が明示されていない『三屋清左衛門残日録』や『風の果て』なども含めています。作家の創作時期によっていくつかの細かい設定が調整されいてるため、本文では広義のものを採用し、諸評論家が海坂藩を背景だと考えている作品をすべて海坂ものとしています。

参考文献：

小説の周辺、文春文庫、1990

ふるさとへ廻る六部は、新潮文庫、1995

「蝉しぐれ」と藤沢周平の世界、文藝春秋、2005

藤沢周平と荘内、ダイヤモンド社、2007

海坂藩大全、文藝春秋、2007

「蝉しぐれ」の世界、鶴岡市藤沢周平記念館、2011

「海坂藩」のふるさと、鶴岡市藤沢周平記念館、2015 [↑](#endnote-ref-1)
2. **边读，边爱——日本文学品读中的心路变迁**

**遼寧師範大学 外国語学院 楊晴**

国人对日本文学抱有特殊的情感，恨之入骨拒绝阅读者有之，抛开偏见用心阅读者亦有之，但无论阅读的人是否带着有色眼镜，日本文学无疑时刻以其浓浓的和风味道提醒着人们它的存在。

抛开历史不谈，我对于日本文学中干净温暖，绵延但不拖沓的语言很有好感。日本文学作品里的冬天是温泉和浴衣，是冒着热气的关东煮，是裹着围巾只露出眼睛的日系美少年；夏天是西瓜烟花夏日祭，是少女的木屐，是老爷爷的蒲扇，是雷声滚滚压过屋檐。读的多了，便以为日式文学就是这样的浪漫轻松了，带着乌托邦一般的朦胧情愫。

而真正开始阅读和认真思考日本文学是从这几年开始。仔细想来，在日本那样节奏快压力大的社会里，那种温暖甚至温吞的情感是不可能作为都市人生活的常态的。日式小文里所描绘的田园诗似的生活更多的存在于过去，乡下，甚至是人们的臆想里，作为一种精神休憩的寄托，不过是粉饰太平，看多了未免无趣。

于是正式接触日本文学，我选择从东野圭吾开始。我怀着一颗近乎敬畏的心阅读了《解忧杂货店》[]一书，但却丝毫没有产生如饥似渴想要读完的激情，也没有随着情节一同跌宕起伏，这似乎是一本随时可以拿起放下的书。阅毕，对书中的逻辑推理没什么印象，对浪矢爷爷讲述的人生哲理也感受不深，就这样十分平淡地读完，连一点浪花都没能激起。我不禁有些愤懑，想不明白是这本书被过誉了还是自己不能理解它的美妙，因此对日本文学产生了“无趣、充满意淫与幻想，粉饰太平”的印象，在这样的误区下，我对日本文学感到一些失望。

直到偶然接触了太宰治的作品，发现电影《被嫌弃的松子的一生》[]中的台词“生而为人，我很抱歉”出自太宰治的《人间失格》[]而《人间失格》一题的含义便是“失去作为人的资格”，这样的话语充满深重的自卑和压抑，与之前所读的田园诗似的日本作品、与大多数积极向上的日漫、日剧风格不同，似乎更贴近于国人对日本的印象——侵华战争中阴暗残酷的，文化中充满杀戮的民族。带着一丝猎奇心理阅读了一部分太宰治的作品，我竟然出乎意料地改变了对于日本文学的看法，不是厌恶和痛恨，从太宰治和以他为代表的无赖派以至于二战后的一众战后文学中，我看到的是有血有肉的日本文学。

太宰治的《人间失格》确实是毁灭式绝笔之作，用孩童般拙稚的口吻直白地将比死亡更残忍的话说出口，给读者的震撼不可谓不大。正如高尔基所说“太宰治的作品一方面有带着自身经历主人公的挣扎；另一方面坦然描述着血的事实。正因如此，他比那些把自己当做上帝的作家，更有人情味，更能打动读者。”佐藤干夫说“村上春树《且听风吟》中‘十全十美的文章和彻头彻尾的绝望’深受太宰治影响”，太宰治作品中传递出的敏锐而纯粹的感受性吸引着一代又一代的年轻人，在太宰治颠覆世界观的大集合里寻找着自己秘而不宣的小交集。

太宰治为代表的这一类作家改变了我对日本文学的看法，在太宰治的一系列书中，首先给我最大冲击的自然是《人间失格》，而其后阅读的一系列作品让我产生了在日本文学中久违的如饥似渴的感觉，太宰治的遗作《Good-bye》[]给我十足的遗憾，无比想要看到结局的情感是那么强烈，我知道我从那一刻开始爱上日本文学。

与其他战后文学不同，太宰治的作品不写战争。经历丰富至满身沧桑的他写男性和女性，写人生的虚妄和荒诞，写自杀和酗酒，写民众眼中的乱世，他求真却受到伤害，求实而不得。日本评论家小崛杏奴分析“说到女性的残虐没有人比太宰治更理解”。但太宰治仍试图塑造自己理想世界中的女性形象，或许他将对自己的嫌恶注入到了同为男性的角色的创作中。太宰治在乱世中流离，坦诚地说出自己对共产党运动的态度，不掩饰自己酗酒和为情自杀，不避讳地大谈人性的虚妄，这样直白的表达让人看到日本文学的另一面。那是一种毫不掩饰的将自己的黑与暗，恨与倦揭露给世人，它所传递出的每一次对制度的愤懑和对现实的无奈，每一次心存侥幸和缺乏自控，都是我们心中没说出的话，都是我们在现实中容易犯的错。在这样的作品里，我们很容易找到自己。

了解了太宰治，我开始接触、了解二战后的日本战后文学，侵华战争不仅带给中国苦难，也使日本平民承受战争的折磨。战后派文学以深刻尖锐而细腻的笔触描写了那场帝国主义战争及日本军国主义的残酷统治给日本人民造成的巨大精神创伤和对人们心灵的扭曲,揭示着日本军国主义统治的反动本质。[]相信如果了解了这段历史，国人也能改变对日本整个民族的看法，不再局限于那场由反动统治者为了自身利益而挑起的帝国主义战争，不再一味敌视日本民众，从而达到互相交流，互相理解，互相尊重的理想状态。

 今年，是中日建交45周年，就让中日友好世世代代延续下去，这不仅是国家层面的双赢，能读到更多更好的日本文学作品，也是我们所怀有的希望。

**光阴荏苒须当惜——读《京都の平熱》有感**

**蘇州科技大学 外国語学院日本語学科 庄寓諧**

 集中心神，聆听层层叠叠的时间里，流转的京都，在时光的车辙上，印下的点点痕迹。濡湿的石片路，水汽氤氲，仿佛水墨在画纸上散开，如黛色江南的烟雨一般，静谧而不失柔情；青苔的气息袅袅飘来，惹人心醉；踏着传统的木屐，缓缓涉足其上，“喀哧喀哧”，与那细细粼粼的雨声，相映成趣。这，别处难觅的场景。

京都之于异乡人的，最震撼的一点，或许便是传统的“严拒生客”的规矩吧，这在消费者意识日趋抬头的现代，多少格格不入。如日剧《鴨、京都へ行く》里的开场画面所展示的那样，传统旅店只接受预约的、抑或是熟人介绍的客人入住。可这并不是他们失礼的表现，而是为了留有准备的余地，以便将京都最引以为傲的一面，或风情，或人情，更完美地呈现于客人面前。鹫田清一教授对此的诠释是，“千百年来，人民在统治者的施压之下，于这城市的一隅，寻求得以生存的缝隙；渐渐的，他们亦寻得了脱离于血脉的互助人脉。他们有时为求自保，选择从内部封闭起来；但只要有熟人引介，这扇门亦情愿为外人敞开。”或许正如教授所说，日本人的民族性之一，便是对于外界力量存在戒备之心。多少有些内敛的他们将他们的那份情意深埋心中，继而以真诚之心化为实际行动，当中无过多言语的粉饰，因而表面看来未免过于刻板式的礼貌，或是有一丝冷漠。

跟随着鹫田教授的脚步，我徜徉于京都的日常生活中。这本书最吸引我的，是介绍制作京都名物之一的小吃“薄薄烧”的老店——“山本曼波”的那部分。教授最难忘的一幕场景，是多年前老板娘为他张罗美食。年轻的教授在品尝美食时，非常重视食材本身所酝酿、散发的诱人香气以及味觉享受。但除此之外，他更在意别人为自己辛勤付出的那份浓浓情意。他描述自己每回踏入居酒屋、中餐馆，总会立即在吧台上坐下，抬头凝视厨师制作料理的认真模样。食材在自己面前被巧妙运用、制成佳肴时的这种特有感觉，难免令他愈发感恩他人为自己的付出。这份感恩之心，不是仅仅流于形式的一句「いただきます」或「ごちそうさまでした」这种几乎不再经思考、出于习惯的自然表达，而是发自内心的、对自我内心叩问之下的强烈感受。这种内心的感触，是在西餐厅那种厨房与餐厅相隔甚远的环境之下，难以体会得到的。这使我不禁联想到日剧《ワカコ酒》里的一幕。女主人公时而夜晚步入日式料理店，于吧台处就坐，饱含感激之情接过老板亲手烹饪的料理，搭配店员小哥准备的各式日本传统酒，细细品味一番。当你仔细观察料理师傅娴熟的手艺、专注的神情时，不免为之感动。这种值得称道的匠人精神，经由眼睛这扇心灵的窗户一览无余。只可惜，伴随着时代的变迁，由于人工智能等科技手段的进步，这种人与人之间通过眼神交流，进一步扣击内心的珍贵体验，愈来愈难得。

无独有偶，令鹫田教授感到无限惋惜的，还有悄然变化着的市井巷弄间。传统的商店街，京都的风情，日趋为时下流行的各类连锁店所取代。据教授所言，这些都是在“泡沫经济”后，应运而生。即便如此，它施加于古都身上的创伤，依旧是不可估量的。面对这些时代的变化，我发自内心想表达的，是掩盖不住的惋惜。市井巷弄的变化即是一种信号，一种警示的信号，当传统古意在现代潮流的滚滚浪潮之中，连落脚之处都保留不了的时候，日本的传统又会走向何方？当中华传统在中国大陆不时被商业气氛所牵绊，我不免会庆幸，日本过去以唐为师、不断本地化的历史成果，得以保留。可惜，时代的变迁之余，京都，也没能幸免。任凭光阴的刻度，在京都的每一寸骨节上，展现一出阴差阳错的戏码。这样，真的好吗？

佐佐木克将百年来的京都与东京，进行了对比。因为明治初年迁都江户(东京)的这一决定，使得京都的历史遗迹与传统景致得以存活，而东京则在现代化的脚步声中不断进化为巨型都市。最终，佐佐木的结论是，“迁都东京也可以说是救了京都”。这或许，也是他的一番愿景。

在历史的机缘巧合之下，京都的古意，得以流传、存活至今，这无疑是一件幸事。而当京都如一个半世纪之前，再一次伫立于历史的风口浪尖之上时，挑战是难免的。在旧时代的余烬里寻找新路吗？只是，以我的私心而言，我真心期望京都延续过往的正统的古风古韵。

光阴荏苒须当惜，风雨阴晴任变迁。京都留给当地人的，更多的是情。深深耕耘于这块土地、深爱这块土地的民众，亦会眷恋不舍。

阅读书目：

苏文淑译.（日）鹫田清一.京都の平熱：哲学家眼中的京都小日子.台北：麦田出版社，2016

参考文献：

（日）佐佐木克.江戸が東京になった日――明治二年の東京遷都.東京：講談社選書メチエ，2001

**清淡好风流——读《枕草子》断想**

**雲南大学 外国語学院英語学科 劉宜珂**

我在林荫道上行，风过卷涛声。

咔嚓。

空山松子落呵。天凉了。

天凉好个秋。秋天赏什么？

有倩影，青丝如瀑和服半挽，转头来，懒懒应你一句:秋是黄昏。

初见它是挤在书架最底排，封皮颜色淡淡，仿佛对读者没什么殷切的期待。

纳博科夫有言，作家是做不到百分百诚实的——他们的身后总是站着读者，“姿态”在有意无意间应运而生，叫人如何不做他想。

这却是一本写给自己看的日记。

开卷即欣喜惊诧——从“春，曙为最”起笔，盘点四季，到夏夜、秋暮和冬晨，居然像极了那联佛偈:“春有百花秋有月，夏有凉风冬有雪。”

她把对时节和生活的切肤感受，融于一种倾向于克制的赞美，笔触栩栩，振振欲飞。

全书的记述繁复细碎，无微不至，一层层细节她描摹着色：可爱的事，高贵的事，不相称的事，使人动容的事……有时忘了前面已经记过，无妨，再写它一遍就是。像在串珠子，又像在小口品咂着清淡的吃食。可想当年，平假名，片假名，红笺小字上生息着一种落寞和自足。

她诚心诚意，兀自把玩。

书中出现最多的一句话是“たなびきたる”。

周作人版本作“这是很有意思的”，和林文月所译的“有趣”、“情致”或“意趣”，各有所长。林氏道周氏翻译得不贴切，以为要据不同的语境来处理这个含义丰富的词。

说来我倒偏爱前一种更自然的译法，其实，汉语中所谓“意思”，言有尽意无穷，也是十分微妙，可曲径通幽的。

清少纳言，就是一个很有意思的人。

她的文字里渗透着物哀美学，于一花一木里移情，纯粹地提炼，唯美是也。这与《徒然草》之于追求残缺之美的“侘寂”，如花开两朵，各表一枝。谈《枕草子》，又总绕不开一个《源氏物语》。紫式部是批判的，史诗的，更是悲剧的，她二人晚年的境况都堪称凄凉，可你能在少纳言这儿读出一种浑不自知的可爱和明媚，文气如风行水上，笃定又轻快。早已过了孩提时代，尚能一生烂漫天真。

借她这双纯粹的眼睛来打量:榻榻米、屏风画、足袋木屐纸灯笼。清凉糯实，玲珑精致，“东方味儿”十足。

——这种“东方”却与中国有别。日本人承下我们古早的细节，织成和服上法隆寺和名物裂的纹样。于是你在纹理里窥见了唐宋遗风，空间的隔断保鲜了时间。华夏大地上兴衰更迭，而“天之御中主神”所驭的疆界，只静静倚守着海浪，待得惊涛拍散尘世烟，这支文脉仍在搏跳、生长。

唐人言，轻罗小扇扑流萤，却直叫人想起那个千里之外的东瀛来。

再把地球拨过小半圈，一位阿根廷的老人把目光投向大洋彼岸——博尔赫斯发现中国之于日本，正如希腊之于西方。中国，像一个巨大的影子笼罩着它。

这在平安时代的清少纳言的笔下，淋漓尽致。

一衣带水两相望，你发现，我们两个民族的祖先，听同一声子规啼，赏同一抹梨花白，香山居士的美名漂洋过海，李太白的神来之笔同样倾倒一片异域文人。从唐衣唐锦到牛郎织女的传说，汉家风致悉数传到了大和，“三四/七月的早晨”记述的访妻婚制，还叫人想起云南摩梭人的走婚之俗。

他们对唐诗的喜爱大有渊源——日本自古崇书。草子有记一则趣闻：早先村上天皇考察女御记诵《古今集》，以棋子记录讹误，一夜竟问了整整二十卷，“从前就是身份不高的人，也都是懂得风流的”。

提到《古万叶集》、《伊势物语》这些经典，少纳言总是信手拈来。物语和俳句不同于中国的诗词歌赋，它更幽微，又随性，淳朴干净，不取佶屈。掩卷散步湖畔时，一句“猿泽池兮玉藻漂,苕苕摇荡疑乱发,犹似吾妹兮寝妖娆”被她记下，又攀上我的脑海，缘来这番心境，是古今四海皆通融的。

草子中亦有及山川风物。中式园林讲究名堂和排场，而日本的枯山水，更生一分禅意。佛风东渐后，岛屿小小，伽蓝丛立，有道是“南朝四百八十寺”，这阵“烟雨”只把东瀛楼台也吞纳其中。

枯山水便发迹于禅宗——自乐于是的璞真，这是反求诸己，调和着融天融地的洽然，这是物与我一。无水之水，无山之山，真真方寸地一沙一世界了也。

千年流转，日本古风未减，气韵绵延。时至今日，亦时时可见园林静雅，春意阑珊，樱花树下摇曳三五和纸伞。日本的声音从不聒噪：小而真的观照，竟可以如此深不可测，沁润人心。这番余味清淡，如一阵霡霂在默默地浸淫着，静水流深，流入那飞鸟川、音元川、细谷川、玉星川，流进中国海，流进日本海，直流进太平洋里去了。

参考书目：

《枕草子》[日本]清少纳言，译林出版社

《斩首之邀》[美国]弗拉基米尔·纳博科夫，上海译文出版社

《博尔赫斯谈话录》[阿根廷]豪尔赫·路易斯·博尔赫斯，广西师范大学出版社

**只寻袋里花与月**

**天津外国語大学 国際マスコミ学院漢言語文学 王錦輝**

**一、“闲静古池旁，青蛙跳入水声响”。**

提及禅意，一跃而出的便是王维的 “人闲桂花落，月静春山空。”初读时便觉得那一份空灵被刻画得淋漓尽致无雕琢之感。若看见一谦谦君子着白衣立于桂树下，清风吹过花缓缓而下打在肩上。簌簌的落花声和清凉的月色就这样穿越而来落于鼻尖。读及松尾芭蕉的 “闲静古池旁，青蛙跳入水声响。”那空灵之感似又被唤醒。何为静？并非万籁俱寂也并非空无一人，天然的环境里真实的声音便是静。简单的描写却一下子将你从烟火世俗中拉到寂静的古刹旁。天是静的，你是静的，连时间都凝固在青蛙入水的瞬间。

相传芭蕉做此俳句缘于一段对话。有人问他：“最近如何度日？”他应道：“雨过青苔湿。”那人又问：“青苔未生之时，佛法如何？”芭蕉答道：“青蛙跳入水生响。”佳句便由此而生。禅由心生，美亦由心生。有的人一日看尽长安花也觉无谓，有人带着哒哒的马蹄声做个过客也看遍了世间的美好。他正是内心清净却又充满禅意的人，他笔下蛙声是美，水声是美，雨过青苔是美，目及之处皆美，他看到的美都不沾染烟火世俗之气。由美养心，便有了一颗“出淤泥而不染，濯清涟而不妖”的清心。愿你的心如云般洁白，愿你的平静如古刹静坐千年，愿你路过处月落乌啼皆是美，愿你如他一般遗世独立。

**二、“秋近心相连，四席半”。**

中国的空间常用平方米计算，日本则用“席”，一席约是两平米，最常见大小的则是四席半。王家卫的电影里面曾有句台词：“我不知道是不是我上班的时候忘记关水龙头还是房子越来越有感情。一个人哭的时候给她一包纸巾就够了，但是一座房子哭了你做的就有很多了。”房子是承载记忆的地方，而芭蕉就是在四席半的室内怀念亡妻。

故人已去，可这房子却替你存在。这杯子是你最爱的用的，我记得你拿杯子的姿势，记得你最爱喝的温茶水。这垫子是你亲手做的，是你送我的礼物。你看你走了那么久，这房子还记得你还替我留着你。不由想起《项脊轩志》里那句：“庭有枇杷树，吾妻死之年所手植也，今已亭亭如盖矣”。四席半不仅仅是房屋的大小，它是你离我远去的距离，是你在我生活里的距离，是你的心仍在我身边的距离。四席半在你在，四席半记得你我也还记得你。“愁”是为秋心，在这萧萧的落木之秋一年一年我心仍系你。

**三、“长夏草木深，武士当年泪痕”。**

1185年“坛浦之战”结束源氏平氏之战也落幕了，少年英才源义经带给源氏的荣誉却没有使他此生无虞。哥哥的猜忌使得他的人生走向了暗黑无光的一面。《腰越状》并没有帮助义经昭示他的忠心，反而招致哥哥的讨伐。曾经的天之骄子如今只得逃离京都，命运不但收走了他应有的荣耀还收走了他所有好运，面对命运的嘲弄他只得逃离京都逃离故土，然而命运却并没收手。他不愿一生颠沛失去尊严，甚至隐起曾给予他无上荣耀的姓氏，他从容的舍弃了生命并决绝的带走了妻儿。草木一岁一枯荣，人生却不能涅槃重生。义经短短一生为氏族争荣誉，为家族战斗，向哥哥几次表达真心，神却并没有使得被嫉妒蒙住心的人开窍给义经机会再来。春去秋来，谁还记得他的荣辱呢？若他早知道结局是否还会熬夜苦读，勤学苦练？

芭蕉在《奥州小道》中说：“忠臣义士，据守此城，思功名显赫，过眼云烟。国破山河在，城春草木深。不禁铺笠而坐，怀古落泪，不知时光已逝。”对于义经也就缩为一句“长夏草木深，武士当年泪痕。”道不尽的悲伤尽在那泪痕中，历史中人物的故事也似漫漫长夏里的一棵小草吧，今夏生命旺盛，来年夏天又在哪儿呢？

四、“求施舍，袋里之花和月”。

有人说“只有自由才能给易逝的生命这朵鲜花上赋予光艳和芳菲。”自由是什么？是“竹杖芒鞋轻胜马，谁怕？一蓑烟雨任平生”的肆意，是“仰天大笑出门去，我辈岂是蓬高人”的不拘，还是“从今若许闲乘月，拄杖无时夜叩门”的闲适。对我而言自由是想看花时看花，想听风时听风，下雨天出门也不怕打湿衣裳。对布袋和尚来说自由是“一钵千家饭，孤身万里游。青目睹人少，问路白云头。”一个人自由自在的在天地间徜徉，无所牵挂亦无所羁绊。正因这一份闲云野鹤的自在漂泊使得芭蕉产生了极大的共鸣，仿佛遇见大千世界里的另一个自己，四目相对便了然于胸。走遍四方仍不改佛心，任千山万水踏过也只是布袋为伴。你若问他布袋里有何物贴身不离，他大概会悠悠答道这里面有清澈的溪水、清凉的月光、有松树的影子还有不灭的禅心。

“时时示时人，时人自不识”是他留下的最后的话，而松尾芭蕉却赞他“求施舍，袋里之花和月”，如此风雅世上还有谁人。人生不如意十之八九，能活的如此超脱自在，唯有布袋和尚了吧。芭蕉九字之言却已然将布袋和尚一生尽数展现在我们面前。

要做这天地间少数自在的人，要将世间的美好尽数收于眼底缝在衣袖间。“一人自打花野来，我亦染香花野去”，“求施舍，袋里之花和月”别无他物是也。

参考文献：

1.松尾芭蕉等著，林林译.《日本古典俳句选》【M】.北京市，人民文学出版社，2005.

2.张颖. 《一明一灭一尺间》【M】.北京市，光明日报出版社，2013.

**少年的破灭和成长**

**寧波大学 人文学院 呉犇**

 少年不知愁滋味，了然已是不惑年。事实是，少年并非不知道愁苦是什么，却会压在心里滋生蔓延，不懂如何处理。对于少年的愁绪烦恼，歌德写过，曹雪芹诉说过，许多现代的名家都解读过。其中，我有深切共鸣的，可能就是村上春树笔下的少年了。

 于我，《挪威的森林》（后称《挪》）与《国境以南，太阳以西》（后称《国》）这两部书给予的印象很深刻。书中的主角都是从我这样的青少年纪开始，经历世事，剥落开自身的外皮，一点点成长的。比如《国》中的“初君”，是从小学开始写起的，是一个当时非常的特殊的独生子，原文如是说：“小时候，‘独生子’这句话最让我受不了，每次听到，我都不得不重新意识到自己的不足。这句话总是把指尖直接戳向我：你是不完整的！”。从这里开始定下了他一生的基调，就是人格上总是缺失了一些无法言说的什么。然后他碰上了初恋岛本，一个略有腿疾的独生少女，后因某些原因分开，他又接连碰上泉、泉的表姐、有纪子三位女性，与有纪子结婚后在36岁那年和岛本重逢，几个事件之后反省再塑自身。《挪》中的渡边的故事也相似，中学时代最好的朋友突然自杀，与其有精神疾病的女友直子纠缠不清，身边名为绿子的活泼女生相伴，而后在直子病友玲子的指引下摸索人生。

村上作为一个二战后出生的作家，他的世界是随着战后日本重建国家一道堆砌的，从伤痕累累到资本繁荣，空前的物质富庶给人的是精神的空虚和情感的寂寥，他对这些孤独的理解是非常别致的。他的笔下少年是有愁滋味的，村上多用精妙而复杂的语句来描写孤独愁绪的滋生蔓延，如“水潭有气无力地反射着钝钝的阳光”、“黑乎乎呆愣愣的铁架重重地沉浸在二月冰冷的岑寂中”等。撇开这些技巧不谈，我理解的村上的书的内涵——具体是《挪》与《国》两本，概括地说是少年内心的破灭和精神的成长、成熟。

人很容易念叨过去的美好，其实并不是过去有多美好，而是第一次拥有、第一次失去的快乐与心痛是最强烈的，强烈到让人愿意在多年之后，抛弃一切去换取一次重来的机会，哪怕代价是万劫不复。《国》中的初君便是这样，他爱着岛本但离开了她，喜欢上泉却因无法说清渴求摧毁了她，他娶了有纪子，过上了近乎完美的生活，而天生的缺陷感让他渴望又害怕着不完美，直到岛本的再来和消失彻底击碎了他心中的少年，破灭的废墟之上，他跨出了成熟的一步。类似的，渡边的孤独直接地，来自于所爱之人的死亡。逝者的存在从来不会消失，他们的一言一行、一颦一笑会烙在脑海中，让人无法接受现实中的美好，总是逃避着，逃避着，去找找死者留下的边角。

每个人都存在着自己的孤独，或渴求爱情而无处寻觅，或梦想大富大贵而现实寒伧，或井井有条却索然无味，孤独就是上下求索而走投无路，在泥淖里爬行，能爬出来的人可以走出森林看见太阳，不能爬出来的人就越陷越深到窒息死去。如果我是作者，我可能更会写后一种结局，万劫不复型的。而村上，本着人道的精神，在结局给人一点萌生的希望。

精神的成长成熟无非是一种重构。是人总要失败，大厦总要崩塌，只要理念存在，或者说理念升华，我们就能盖出更牢靠的楼房，塑造一个更完满的自己。但需要明确的是，不止是初君这个人，每个人都是缺憾的，我们的孤独看似是想要填平缺憾，实际上是在抛弃自己。所谓的精神重构，是打碎自己，但不是抛弃自己，反而是在悦纳自己，开始了解自己的缺憾到底是什么，是即便求而不得也能坦然笑之的豁达。少年都是不豁达的，因为年少的人什么都想尝试一下，就一头栽进去，不到得手死不休，故不成熟。

村上的破灭和重建其实是一个东西，主角们都跨在门槛上，只是摇摆不定，所以他好心地设置了提灯人，在主角们开始在沼泽里下沉的时候甩条草绳下去，拽着他们和读者爬上来。这些少年主角作为村上描写的核心，其作用是在书中一点一点捏碎给读者看，再找一块黄土重塑一个新身。所以读他的小说，破碎感抽离感非常强烈，迷茫虚无地能让人感觉魂灵飘走了，到了那个任何声音都被吸收的空间。若是村上使个坏心眼，给这草绳割几道小口，比如让《挪》中的渡边身旁没了绿子，玲子也不来帮助他，或者让《国》里的初君没有妻子的帮助或者离开他，那么整部作品的基调就会暗淡下来了。

凡事不破不立，凤凰涅槃的时候，村上用笔墨点上了一把火。

阅读书目：《挪威的森林》

 《国境以南，太阳以西》

**人生路上，步履不停**

**湖南師範大学 ニュース報道学院 金卓弘**

不知从什么时候开始，我开始对日本这个海对面的国度充满了兴趣。而这片土地上恰好也盛产优美细腻的文学和影像，让我有幸能从书页间、银幕里窥探它的一角。在这些作品中，我注意到有一个题材似乎格外受日本创作者的偏爱，这就是“家庭”。

家庭作为人们最初也是最基本的人际圈子，从不缺少故事。而日本家庭的故事，总是带着这个地方独特的味道。许多作品都令我有所触动，其中由我最爱的电影导演是枝裕和先生撰写的小说《步履不停》是最令我难忘的作品之一。书名「歩いても　歩いても」直译过来大概是“即使不停地走着”。这个重复的短句读起来，像是碎片般自言自语。书的内容也与书名的气质一样，淡淡地叙述着一个平凡家庭的故事。

小说将故事发生的时间浓缩在了一天之内。由主人公横山良多带着新婚妻子和继子去拜访父母开始，短短一天的聚会，杂糅了百般滋味。因救落水儿童而英年早逝的大哥，阴影一般笼罩在横山家。父母在十五年后仍无法接受长子的离世，良多也因父母一直以来对大哥的偏爱而与家人心生嫌隙。这些早已存在的裂痕，又因为良多工作的失意、二婚的妻子而愈来愈深。虽是回家，却全无温馨，字里行间只有尴尬、不满与忍耐。

我不常在书中读到这样的家庭，但奇怪的是，我对这种氛围并不陌生。以往书中展现家庭关系或是幸福美满，或是支离破碎，那些似乎离我都隔着一纸的距离。而像横山家这样，家人之间有着微妙的疏离感，又维持着日常的平静与圆满，似乎才是生活中的多数。我也有一个有些小虚荣、小臭美的母亲，每当她因外人一句夸奖而沾沾自得的时候，我也忍不住在心底偷偷嫌弃她；我也有个偶尔会倔强顽固的父亲，他的言语也常令我感到尴尬难堪；而那个优秀又完美的大哥，想必会引起所有孩子的共鸣。尽管不是每个人都会有亲生兄弟，但那个传说一般的背影，也是许多人成长路上走不出的阴霾。

面对父母，谁不曾有过不满呢。

这一切都是静水下的暗流。偶尔会有打破平静的小口角，像是水面上的涟漪，只消一会儿一切便复归原状。子女们用尽全力逃离父母的羽翼，有的或许能振翅而飞，衣锦而归；而更多的，像良多一样，在广阔的天地间只能勉强苟且着，面对父母就只有无颜面对的惭愧与不安。

但每一个这样的家庭，都有迎来消解的那一刻。

书中描述着团聚的这一天的时候，时不时会插叙七年后良多的回忆——父亲和母亲，在那一次聚会之后相继过世。最初看到这些片段的时候，我有一瞬被提前泄露了剧情的慌乱。但事实上，我们早已被告知了这一剧情——所有人都会迎来父母离开的那一刻。每个人都清楚地知道这一切都是理所应当，却在看到它发生的时候仍然无法接受。

良多以为他和父母关系疏离。哪怕是一年一次的聚会他都如此抗拒，面对分别的时候，心情或许不会太过沉重。书中的描述，也显得冷静克制。父亲在樱花飘落的季节骤然离世，母亲因病倒下时良多也没有及时赶到。没有哭天抢地的悲恸，反而轻得像一声叹息。

但那那未曾说出口的，无法追回的一切，也都像这一声叹息，随着灰烬永远地消散在风里了。

面对父母，谁不曾有过遗憾啊。

书里良多在母亲过世后，得到的教训是：“人生总会犯下不管付出多少代价都无法挽回的过错。”与其说这是一个教训，不如说是一个沉重而无奈的感叹。人怕的不是“过错”，而是“总是”。

这是我在日本文学中常常感受到的，深深的无力感。

家人之间，都会有些无可避免的不理解、有些无法调和的矛盾。父母对于儿女一厢情愿的揣度，子女对父母敢怒不敢言的缄默，真实地发生在许多人身上。即使血脉紧紧相连，即使相互深深爱着，但因我们都是真实生活着的、独立的人，彼此总是有隔阂，总是有无法言说的哀愁。就像良多永远无法了解母亲哼着《蓝色灯光的横滨》时所回想的画面，作为子女，我们也只了解了父母片段的人生罢了。这是面对家人时的一层无力。

面对亲人离世，面对死亡，则是深刻的无能为力。像最后落在大哥相框上的那只蝴蝶。那样微小脆弱的东西，在良多的手里毫无反抗的能力。正如同生命在生老病死的自然法则之下，亦毫无回旋的余地。父母对去世的长子的执念，良多对过世的父母的遗憾，都是人对追不回的东西抱有的残念罢了。

但这些无能为力，并不是全然消极的。日本文学中不仅将现实的家庭平静地铺开在文字间，也借着家庭给人生的遗憾找寻一个温柔的出口。落在大哥遗像上的蝴蝶，紧紧抓着相框的边缘不放。渺小的生命，也有留恋的灵魂，也有与那些绝对优势的力量抗衡的一瞬；良多的母亲将和服送给他的妻子，父亲温柔地鼓励良多的继子淳史成为医生。新的家庭在组成。有一些缺憾，在下一个轮回里得到了弥补的可能。

在日本文学中，缺憾和希望，皆是人生之美。而家庭，正是这些美好的起源和归宿。

步履虽然沉重缓慢，可也只有这样，才能留下真实的足印啊。

**温柔的情愫**------ 读《潮骚》有感

**蘭州大学 哲学社会学院 謝詩楨**

“我拼命地舍弃当时的现实,在文学方面,我已经同别人断绝来往,可以认为正在尽量沉醉于微小而孤独的美的趣味中。……远处大城市的空袭是壮美的。火焰映出五颜六色的光彩,像是在黑夜里遥看高座郡平原那边,死亡和毁灭的盛宴所发出的篝火的光亮。在这些日子里,我大概确实是幸福的。”

 -------三岛由纪夫

我从未去过歌岛，但是我却喜欢幻想歌岛的模样，我也没有真正见过海，但是我却在三岛的文字里闻到了海的味道。那灯塔耸立的断崖下，不断传来伊良湖海峡的海潮声，起风的日子里，这连接着伊势海和太平洋的狭窄的海峡，翻卷起无数的波浪，就像一首舒缓的音乐，随着旋律带来海的气息。在我的想象中，初江和新治的爱情就在一片蓝色大海的潮起潮落中萌芽，生长......初次相遇的新治和初江，就像是两个懵懂害羞的孩子，初江她身穿棉坎肩和扎腿运动裤，手带纯白的劳动手套，健康的肤色与其他妇女别无二致，但是她眉清目秀，她的眼睛直勾勾地凝望着西边海面上空。那里黑压压的的积云中，沉入了夕阳的一点红。寡言的新治还只是第一次遇到初江，就已经模模糊糊地沉捆在了一种好奇的幸福感中，这种自己也说不清的羞怯，给予了他十八年人生中的第一次光亮。

三岛的文字总给人一种幻想感。在三岛笔下，“海”总是作为一个独立的形象展现，它是新治与初江爱情生长的背景。海是歌岛人生产生活的依托，男人们从事渔业航海运输，女人们从事海底采捞，这种渔业化生产模式造就了歌岛人淳朴自然的性格，所以，“海”的性格就是歌岛人的性格。在三岛笔下，“海”又是塑造人物形象不可缺少的因素，海潮骚动，拍击岩石，激起千重浪花，也激荡着初涉爱河的男主人公新治的心：“年轻人感到包围着他的丰饶的大自然与他自身，是一种无上的调和。他觉得自己的深呼吸，是仿造大自然的肉眼看不见的东西的一部分，它深深渗透到年轻人的体内深处，他所听见的潮骚，仿佛是海的巨大的潮流，与他体内沸腾的热血的潮流调和起来了。新治平日并不特别需要音乐，但大自然本身一定充满着音乐的需要”。海，是一切的开始，也是一切的升华。

在我的印象中，三岛是崇尚刚性的，悲剧壮烈的美，他几乎每一部作品都涉及到死亡。死亡，仿佛是一个巨大的、必然的阴影，笼罩着三岛创作的生涯。对于三岛来说，死并不可怕，它代表着一种瑰丽的、悲壮的、迸发的激情。他作品中的死与青春活力的生结合在一起散发出一种诱人的、奇异的迷香。三岛对死亡怀有一种憧憬的心理，尤其是悲壮激昂的殉教性的死亡。因此他的文字都是壮烈而悲剧，给人以极大的震撼的。然而，在《潮骚》中，三岛所呈现的全是暖暖的温柔与热烈。男主角初见心爱人的心动与羞怯，与心爱人在暴风雨中裸露身体，相互对视的激情热烈，还有每一次的相遇，对她说出的每一个“我爱你”，“我要娶你”......爱情，一直是文学创作中的一个永恒话题。三岛也不例外，透过《潮骚》这样一个纯洁的爱情故事，在挖掘一个新的自我，一个充满温柔和明亮的爱的自我。

大海，给予了三岛所有的情感寄托和表达。新治第一次见到初江被激烈的感情冲击得彻夜难眠而心有不安时，只要一望见大海，平日里那种熟悉的劳动的热血就在全身沸腾起来，心情也会变得平静。当新治目睹初江的胸脯时，他联想到“海面湛蓝而汹涌的波浪的起伏”，让人从中感受到初江的健美。他们的初吻发生在海滩上，并把初吻比作海藻般的味道。新治也是在大海中获得了初江父亲的认可，收获了一个美满的结局。三岛就是新治，新治就是三岛。三岛的心和新治一样，是明亮而温柔的，是勇敢而热血的，渴望爱，也能勇敢去追逐。

日本是一个美丽的岛国，是一个富有冒险的热血和拼搏力的国家。他们的骨子里集温柔与热血于一身，大海也赋予了他们所有物质上和精神上的要求。三岛就是这样一个典型的代表，集所有的情愫于一身，安静而热烈，热烈而富有力量！

**阅读书籍：**

 书名：《潮骚》

 作者：三岛由纪夫

 出版信息：上海译文出版社 2014年出版

**参考文献：**

	1. 张艳:《<潮骚>中的自然美与人情美》，黑龙江教育学院学报。
	2. 李雪梅：《<论潮骚>的美学特征》,山东语言与文学学报
	3. 郑慧娜：《从三岛由纪夫的小说看日本人“以死为美”的死亡观》，长春师范学院学报。
	4. 朱颖：《论<潮骚>中的希腊古典主义肉体美学观》,牡丹江大学学报。
	5. 王贤玉：《自然美与人情美的赞歌》，哈尔滨大学学报。
	6. 李利伟：《自然与生命的交响与共融》
	7. 皮婵媛：《论三岛由纪夫的死亡书写》，广东外语外贸大学。**专著**：

1、唐月梅：《三岛由纪夫传》，新世纪出版社，2003年10月第1 版。

2、三岛由纪夫：《残酷之美》，唐月梅 译，中国文联出版社，2000年第1版

3、亨利·斯格特·斯托克斯：《美与暴烈：三岛由纪夫的生与死》，于是译，上海书店出版社2007年第1版。

4、叶渭渠：《三岛由纪夫研究》，北京：开明出版社 [↑](#endnote-ref-2)